

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第8集

一般国道140号(寄居町・花園村工区)

埋蔵文化財発掘調査報告

— I —

下 南 原

1982

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

花園村は、埼玉県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地を有しています。なかでも荒川に沿った河岸段丘上には縄文時代から平安時代にまでいたる遺跡が集中しており、その段丘上を一般国道140号線が熊谷から寄居方面へと走っています。ところが、関越自動車道花園インターチェンジの開業にともない、バイパスが花園村大字黒田から寄居町大字桜沢まで延長4,500mが建設されることになりました。埼玉県教育局文化財保護課では、花園村教育委員会の協力を得て、黒田地区の分布調査を行い、その結果「下南原」遺跡が確認されたのであります。

調査は、埼玉県の委託を受けて、埼玉県教育委員会が直営で、整理作業は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、引き続き県の委託を受け実施したものであります。

その結果をまとめたものが本書でありますが、多くの新しい事実が発見されて、記録保存の成果はもとより、これらの資料の数々は、学術研究に資するところが大きいものと思われます。

最後になりましたが、この記録が完成するまでに種々御協力をいただいた花園村教育委員会や地元の方々、埼玉県土木部道路建設課、熊谷土木事務所の方々に深く感謝いたします。

昭和57年3月

財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例　　言

1. 本書は埼玉県大里郡花園村大字黒田に所在する下南原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は一般国道140号線バイパス建設に先だつ事前調査であり、埼玉県教育委員会が調整し、埼玉県の委託により埼玉県教育委員会が主体となり実施したものである。整理、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和56年度に受託し、実施した。

なお、調査の組織は2ページに示したとおりである。

3. 出土品の整理および図の作成は鈴木敏昭、小島糸子、松村和男が主にあたった。
4. 発掘調査における写真は鈴木、山形洋一が、遺物写真は鈴木が撮影した。
5. 本書の執筆者は、その執筆分担の文末に氏名を記した。
6. 本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次の通りである。
遺構　住居跡（1/60）、土壙（1/60）
遺物　土器実測図（1/5）、土器拓影図（1/3）、石器実測図（1/3、1/2）
7. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団、調査研究部第四課職員があたり横川好富が監修した。
8. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示、御助力を得た。
青木秀雄、石岡憲雄、笠原信男、金子真土、山形洋一

目 次

序

例 言

I 調査に至る経過.....	1
II 遺跡の立地と環境.....	3
III 遺跡の概観.....	7
IV 調査の経過.....	11
V 遺構と出土遺物.....	12
1. 遺構.....	12
a. 住居跡.....	12
b. 土 壤.....	13
2. 遺構出土遺物.....	19
a. 土 器.....	19
b. 石 器.....	29
c. グリッド出土遺物.....	31
a. 土 器.....	31
b. 土 製 品.....	49
c. 石 器.....	49
VI 結 語.....	58
1. <焼石土壙>について.....	58
2. 下南原遺跡出土土器群の分類と編年.....	61
3. 繩文原体の観察.....	65
4. 土器文様の解説へ向けての序.....	67
5. <打製石斧>について.....	72

挿図目次

第 1 図	下南原遺跡周辺の地形と縄文時代遺跡 S = 1 / 100,000	3
第 2 図	下南原遺跡および周辺の縄文時代遺跡	5
第 3 図	遺跡の拡がり(推定)と140号バイパス予定路線図	8
第 4 図	発掘グリッドおよび遺構分布図	9
第 5 図	土層図 水糸レベルは標高 75.00 m	10
第 6 図	第 1 号住居跡 水糸レベル 73.90 m	13
第 7 図	土壤実測図(1) 水糸レベル 73.90 m	15
第 8 図	土壤実測図(2) 水糸レベル 73.90 m (16・18~20 のみ 73.70 m)	17
第 9 図	第 1 号住居跡(1~9)、第 2 号土壤(10~17)、第 5 号土壤(18~20)、 第 6 号土壤(21~23)、第 7 号土壤(24)、第 8 号土壤(25)、第 10 号土 壤(26~30)、第 13 号土壤(31~32)、第 14 号土壤(33~41)、第 15 号土 壤(42~45) 出土土器拓影図	23
第 10 図	第 17 号土壤(46~57)、第 18 号土壤(58~68) 出土土器拓影図	25
第 11 図	第 19 号土壤(69~89)、第 20 号土壤(90~91) 出土土器拓影図	27
第 12 図	遺物の検出状況	31
第 13 図	4 C グリッド出土土器拓影図	33
第 14 図	4 C グリッド出土土器拓影図	35
第 15 図	4 C グリッド出土土器拓影図	37
第 16 図	4 C グリッド出土土器拓影図	39
第 17 図	4 C グリッド出土土器拓影図	41
第 18 図	1 E グリッド(131)、2 D グリッド(132)、2 E グリッド(133)、3 A グリッド(134~136)、3 C グリッド(137~140)、3 D グリッド(141~ 148)、4 A グリッド(149~156)、4 B グリッド(157~166)、4 D グリ ッド(167~168) 出土土器拓影図	43
第 19 図	4 C・3 D グリッド出土土器拓影図	45
第 20 図	第 1 号土壤(2~3)、第 19 号土壤(4)、4 C グリッド(1) 出土土器実 測図	46

第 21 図 4 C グリッド (5, 6, 8, 9)、4 C + 3 D グリッド (7) 出土土器実測図	47
第 22 図 土製円板拓影図	49
第 23 図 第 1 号住居跡 (1 ~ 3)、第 13 号土壤 (4)、第 14 号土壤 (5)、第 15 号土壤 (6)、出土石器実測図	52
第 24 図 第 15 号土壤 (7)、第 19 号土壤 (8 ~ 9) 出土石器実測図	53
第 25 図 グリッド出土石器実測図	54
第 26 図 グリッド出土石器実測図	55
第 27 図 第 1 号住居跡 (22)、第 13 号土壤 (23)、第 15 号土壤 (24)、グリッド (25 ~ 32) 出土及び調査区外表採 (33) 石器実測図	56
第 28 図 調査区外表採石器	57
第 29 図 集落における焼石土壤の空間配置図	59
第 30 図 繩文原体組成円グラフ	66
第 31 図 下南原遺跡出土土器 (第 20 図 1 ~ 3) 展開模式図	69
第 32 図 各遺跡出土土器の展開図集成	71
第 33 図 打製石斧の諸属性円グラフ	75
第 34 図 打製石斧形状相関図	76

表 目 次

第 1 表 下南原遺跡周辺の縄文時代遺跡地名表 (番号は第 2 図中の数字と同じ)	6
第 2 表 グリッド別縄文原体検出一覧表	66
第 3 表 石器計測表	73
第 4 表 形態と自然面	74

図版目次

- 図版1 遺跡全景および土層(B—B')
- 図版2 第1号住居跡・第7号土壙、
第1号土壤
- 図版3 第2号、3号、4号、5号、
6号、8号、9号土壤
- 図版4 第10号、11号、12号、13号、
14号、15号、16号、17号土壤
- 図版5 第18号、19号、20号、21号、
22号、23号土壤
- 図版6 土器(1)
- 図版7 土器(2)、土器(3)
- 図版8 土器(4)、遺構出土土器(1)
- 図版9 遺構出土土器(2)、遺構出土土
器(3)
- 図版10 遺構出土土器(4)、グリッド出
土土器(1)
- 図版11 グリッド出土土器(2)、グリッ
ド出土土器(3)
- 図版12 グリッド出土土器(4)、グリッ
ド出土土器(5)
- 図版13 グリッド出土土器(6)、グリッ
ド出土土器(7)
- 図版14 グリッド出土土器(8)、グリッ
ド出土土器(9)
- 図版15 グリッド出土土器(10)、グリッ
ド出土土器(11)
- 図版16 グリッド出土土器(12)、グリッ
ド出土土器(13)
- 図版17 遺構出土石器、グリッド出土
石器(1)
- 図版18 グリッド出土石器(2)、調査区
外表採石器

I 調査に至る経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事を進めているが、一般国道140号線でも関越自動車道の建設等に伴い、寄居町、花園村地内でバイパスの建設が計画された。

県教育局文化財保護課では、開発関係部局と各種の協議を実施しており、文化財保護と開発事業との調整を図っている。今回の事業の担当課である県土木部道路建設課とも同様の調整は進めていた。

道路建設課から路線内の文化財の所在について文化財保護室（当時）あて照会があったのは、昭和48年12月17日付け道建第1103号をもってであった。これに基づいて文化財保護室では分布調査を実施した結果、縄文時代の集落跡及び古墳群が所在することが確認された。この結果を検討して、昭和49年5月28日付け教文第905号をもって、1. 文化財は現状保存することが望ましい。2. やむを得ずかかる区域については発掘調査を実施されたい。という主旨で道路建設課あて回答した。

その後、文化財保護課と道路建設課では保存策について種々の調整がなされたが、路線変更是不可能となつたため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。路線内には小前田古墳群をはじめ4か所の遺跡が確認されているが、これらの遺跡について改めて発掘調査のための協議を開始した。

4か所の遺跡のうち花園村黒田地内の上南原遺跡については昭和52年度に調査を実施しているが、他の3か所についても、早期調査の要望があった。道路建設課からは昭和53年4月10日付け道建第45号をもって調査についての協議書が提出された。文化財保護課では内部調整を図りつつ、道路建設課と協議を進め、昭和53年5月19日付け教文第65号をもって回答した。

その内容は次のとおりである。

1. 調査機関
2. 調査範囲
3. 調査費用
4. 調査期間
5. 調査体制
6. その他

これに基づき発掘調査は文化財保護課が執行委任を受けて実施することになった。

文化財保護法に基づき埼玉県知事からは埋蔵文化財発掘通知が、県教育長からは埋蔵文化財発掘調査通知が文化庁長官へ提出され、昭和45年1月15日から発掘調査は開始された。

文化庁からは53委保記第17-2136号をもって調査通知を受理した旨の通知があった。

（井上尚明）

発掘調査の組織

1. 発掘

主 体 者	埼玉県教育委員会	教 育 長	石 杉 秋 早 柿 駒 本 谷 太 千 横 鈴 市	田 山 葉 川 沼 宮 間 川 田 村 川 修 敏 川	正 泰 一 智 幹 岳 清 和 修 富 昭 修	利 之 男 明 夫 朗 史 清 夫 平 富 昭 修
事 務 局	埼玉県教育局文化財保護課	課 長	佐			
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	課 長	補 佐			
		文化財第二係長				
庶務經理	埼玉県教育局文化護保護課	庶 務 係 長				
発 掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長				

2. 整理

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 沼 渡 伊 関 福 横	井 尻 渡 藤 野 田 増 田	五 和 澄 健 一 浩 逸	郎 也 夫 光 人 朗 富 昭
		副理事長				
		常務理事				
庶務經理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長				
整 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長				
		調査研究第四課長				

3. 協力者

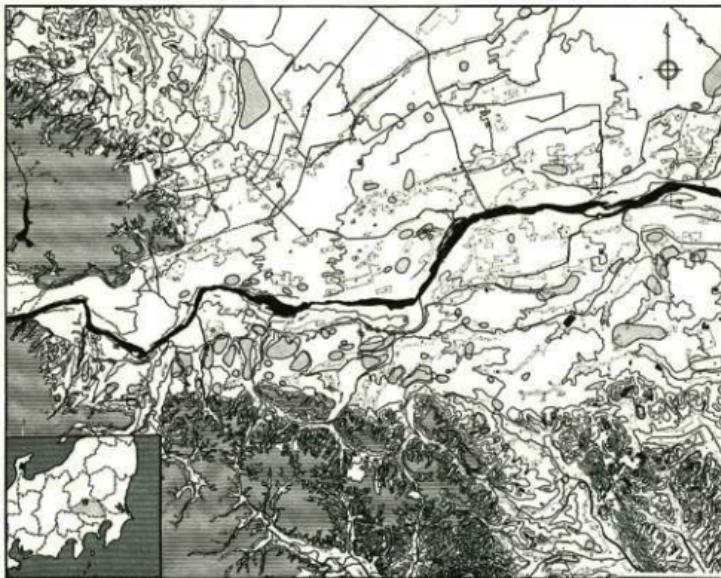
大里郡花園村教育委員会、地元区長及び地元住民

Ⅱ 遺跡の立地と環境

下南原遺跡は大里郡花園村大字黒田字北原472に所在し、丁度、秩父鉄道永田駅の西北西1.0km、また、関越自動車道花園インターチェンジの北方0.5kmの地点に当っている。昭和46、47年度に埼玉県教育委員会が実施した分布調査の際には未確認であったが、今回140号バイパスの開通に伴い新たに発見された遺跡である。とりあえず、遺跡に立って周囲を眺めてみよう。

遺跡の南前方には東流する荒川が眼下に望まれ、背後には、妙義、榛名、赤城の両毛三山が優美に、そして威風堂々と聳えているのが遠望される。西には秩父の山々が峰を連ね、その裾野は遺跡から約4kmの近くにまで迫っている。そして東方には関東平野が延々と扇を広げているのである。下南原の地に集落を営んだ縄文中期人はこうした景観の中に寝起きしていたのであったろうことは想像に難くないが、さらに彼らの居住誘因を立地と環境を検討しながら考えてみようと思う。

ところで、花園村は、江戸時代には秩父往還、あるいは上州、信州方面へ至る中山道の脇往還の問屋場として栄えた小前田宿を有し、交通の要衝としての一定の役割を果たしてきた。小前田駅周辺の街道筋には今なお、その面影の一端が偲ばれる。産業としては、とりわけ養蚕の町として、その名を全国に轟かせていたが、近年は、養豚、花卉園芸などの東京への出荷が農業経営の中心とな



第1図 下南原遺跡周辺の地形と縄文時代遺跡 S = 1/20,000

り、県内でも有数の近郊農業地帯となっている。関越自動車道花園インターチェンジの開業、そして140号バイパスの相繼ぐ開通は、さらにこうした傾向に拍車をかけており、現在は、急速に都市化の波が打ち寄せつつある状況にある。

一方、花園村は荒川北岸の扇状地上にのっている関係から、干ばつの害を受けやすく、井戸掘りに多くの力を割かなければならないという苦難の歴史を有している。今では農業用排水等の整備が進み、こうしたことは忘れ去られつつあるが、我々の発掘調査に協力してくれた作業員の中にも何人かは井戸掘りの経験を持っており、時折、話題にのぼったものである。こうした自然の環境は、ある意味では運命的でさえあっただろう。彼らの生き様は我々に貴重な経験として限りない興味を喚起させざにはおかない。

さて、下南原遺跡は荒川がつくる寄居鉢形段丘（荒川段丘）上にのっている。秩父山地に源流する荒川は皆野町から寄居町付近までは、景勝地長瀬の岩疊で象徴されるごとく、結晶片岩からなっており、川幅も狭く、河原の発達は貧弱で、狭谷地形をなしている所が多い。だが、寄居を下ると徐々に川幅を広げ、流れが緩やかになり、河原も発達し、広くなる。花園村黒田付近では河原まで含めれば、川幅が200~300mの箇所も少なくない。寄居鉢形段丘は、こうした場所に形成された河岸段丘であり、櫛挽原台地の南縁を刻む河岸段丘と右岸側の櫛挽原面に相当する上位段丘面を含めての河岸段丘を併せた部分を総称する。左岸側には中位段丘が2段と局部的な下位段丘が1段の合計3段あり、右岸側には上、中、下の各段丘が合計3~4段形成されている。下南原遺跡は、そのうち左岸の下から3段目である中位段丘(Gt II)上に占地している。土地自体は表土まで砂礫が多く、調査時には多大な困難を伴ったが、遺跡南端の段丘崖からは常時、湧水があり、居住地としては適地であったことが窺える。同様の立地環境にある既掘の縄文時代遺跡を花園村内に限ってピックアップしてみると、前期の上南原遺跡、中期の台耕地遺跡、後・晚期の橋屋遺跡をあげができる。いずれも集落としての規模は大きいようである。中でも台耕地の地は、縄文時代以降も古墳群（黒田古墳群）として、さらに製鉄工人の大集落として、しばしば人々の占地の対象となってきた。なお、寄居に到ると縄文時代前・中期の大集落である北塙屋遺跡も筆者らによって調査されている。こうした遺跡は、いずれも荒川によって育くまれた集落と総括できるのではなかろうか。

ところで、柿沼氏は、櫛挽台地周辺の縄文時代の遺跡群をマッピング処理することによってA~Dの4グルーブに分け、それらに共通する遺跡立地のあり方を（扇端湧水の集中地帯）=(縄文時代の遺跡の集中地帯)という図式にまとめた（柿沼1979）。氏によれば荒川左岸の段丘上に存在するものはDグルーブとされた。従って、前記した下南原遺跡をはじめとする諸遺跡はすべてDグルーブに属することは言うまでもない。

このように、縄文時代の集落立地にスポットを当てた研究は、その重要性にもかかわらず、比較的実践例が少ない。縄文人の生業活動の一端を垣間見る為の一要素として、また集団移動及び地域組織の追求の上でも欠かせない必須の作業であることを確認しておこう。

第1図は下南原遺跡を中心として埼玉県教育委員会発行の『埼玉県遺跡地図』（埼玉県教育委員会1975）を基礎とし、「大里郡寄居町東遺跡発掘調査報告」（梅沢1973）、『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』（並木1978）を参照しながら、縄文時代の遺跡を地形図上におとしたものである。櫛挽原台地



第 2 図 下南原遺跡および周辺の縄文時代遺跡

上と寄居鉢形段丘上との遺跡の集中度の相違には圧倒的なものがある。すなわち、寄居鉢形段丘上は縄文人の生活環境としては好適の地であったことが窺い知れるのである。

だが一方で、荒川の左岸と右岸の遺跡密集度の相違も同時に注意される。右岸の露梨子台、上の原台を中心赤浜に到る地域は縄文集落が目白押しに、あたかも連っているかのごとく観察される程、河岸段丘上に集中占地している。何が彼らをして、これ程までにこの地への居住を誘ったのだろうか。勿論、湧水の集中度も一因ではある。だが、左岸と右岸の差はそれのみとは思われない。あるいは背後に不毛な扇状地をもつか、動植物の豊かな宝庫である森林をもつかという相違の反映かも知れない。いずれにしろ、こうした方向への取り組みは、生活単位領域を認識することへもつながる、今後の大きな課題である。

(鈴木敏昭)

第1表 下南原遺跡周辺の縄文時代遺跡地名表(番号は第2図中の数字と同じ)

1. 下南原遺跡(中期)
2. 上南原遺跡(前期)
3. 台耕地遺跡(前・中期)
4. 宮台遺跡(中・後期)
5. 宮林遺跡(不詳)
6. 西上遺跡(中期)
7. 東大塚遺跡(中期)
8. 横屋遺跡(中・後・晚期)
9. 北塚屋遺跡(前・中・後期)
10. 上宿遺跡(不詳)
11. 高城遺跡(中期)
12. 谷津遺跡(中期)
13. 金獄遺跡(中期)
14. 岩崎遺跡(前・中期)
15. 水川台遺跡(中期)
16. 薬師台遺跡(前・中期)
17. 愛宕山東遺跡(中・後期)
18. 八幡台遺跡(中期)
19. 町田耕地遺跡(後期)
20. 東遺跡(中・後期)
21. 上の原遺跡(早・中期)
22. 甘粕原遺跡(早・前・中期)
23. ゴシン遺跡(早・前・中期)
24. 露梨子遺跡(中・後期)
25. 大塚遺跡(中・後期)
26. 羽毛田遺跡(後期)
27. 日向上遺跡(前・中期)
28. むじな塚遺跡(中期)
29. 上郷西遺跡(前期)
30. 上郷A遺跡(不詳)
31. 東原遺跡(後期)
32. 昌国寺遺跡(後期)
33. 常楽寺南遺跡(後期)
34. 伊勢原遺跡(中期)
35. 宮の前遺跡(中期)
36. 南側上町遺跡(中期)
37. 庚申塚遺跡(中・後期)
38. 舟山遺跡(早・前・中・後期)

III 遺跡の概観

遺跡は荒川左岸の中位段丘上にのる。段丘崖付近は南東方向に傾斜が若干強くなる傾向はあるものの、全体的には平坦な地形である。この段丘は旧流跡を含むと思われる、比高差の少ない、小さな谷を経て、さらに平坦な扇状地地形である櫛挽原台地へと広がりを示す。歴史的には、遺跡の部分は東へ舌状に張り出した、わずかな高台上にのる。段丘下の水田面との比高は約5mを測る。荒川の河原からは約15mの比高差を持ち、見晴らしは良好である。なお、段丘崖からは常時、湧水があり、居住地としては好適地であったことが推測される。

現在、遺物が散布する地点は、段丘崖にはほぼ沿って、幅約150m、長さ約250mの範囲にわたる。集落の形もほぼ同様となるのであろう。それは、後述する遺構の検出状況からも裏付けられると考えられる。採集された遺物の時期は、ほとんど例外なく、縄文時代中期の加曾利E式に属する土器片であった。その散布の密集度の高い部分は今回の調査地よりも西方に寄った部分であった。

路線は、この遺跡の南東端部をほぼ南北に横切る。だが、今回は種々の事情で路線の南半分、すなわち、現在の140号以南に限って調査を進めることになった。発掘グリッドは第4図のごく設定した。一辺は10mである。検出された遺構は、住居跡が1軒、土壙が23基で、いくつかの不詳土壙を除いて、いずれも縄文時代中期に属する。検出区は2C、3A～3C、4A～4Cに片寄っており、それは今回の調査区の北西端に当る。すなわち集落の限界が確認されたと言えようか。ここで、調査成果と立地する地形等を鑑みると、下南原の集落は大部分が調査区の西方に埋もれていることが予測されるのである。

なお、下南原遺跡の土層図を第5図に示したが、図中のセクションポイント AA'、BB'は第4図のAA'、BB'と等しい。以下に各層の説明を簡単に記す。

第1層 明るい茶褐色の耕作土層である。

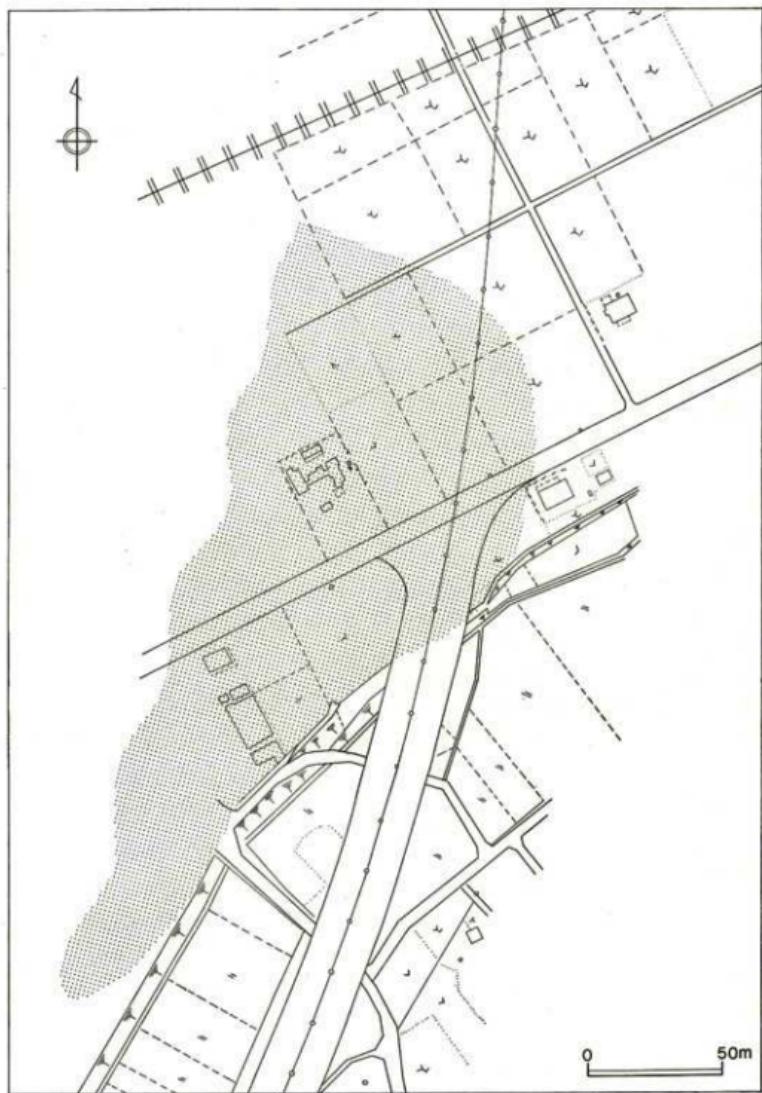
第2層 黒味がかった茶褐色土層である。粒子は粗いが、ややしまりのある土層で、若干の土器片を含む。

第3層 黒褐色土層で最も大量の土器片を含む。本土層が縄文時代の遺物包含層である。第2層に比して、全体的にしまりに欠ける。径2～5cmの小礫を含む。

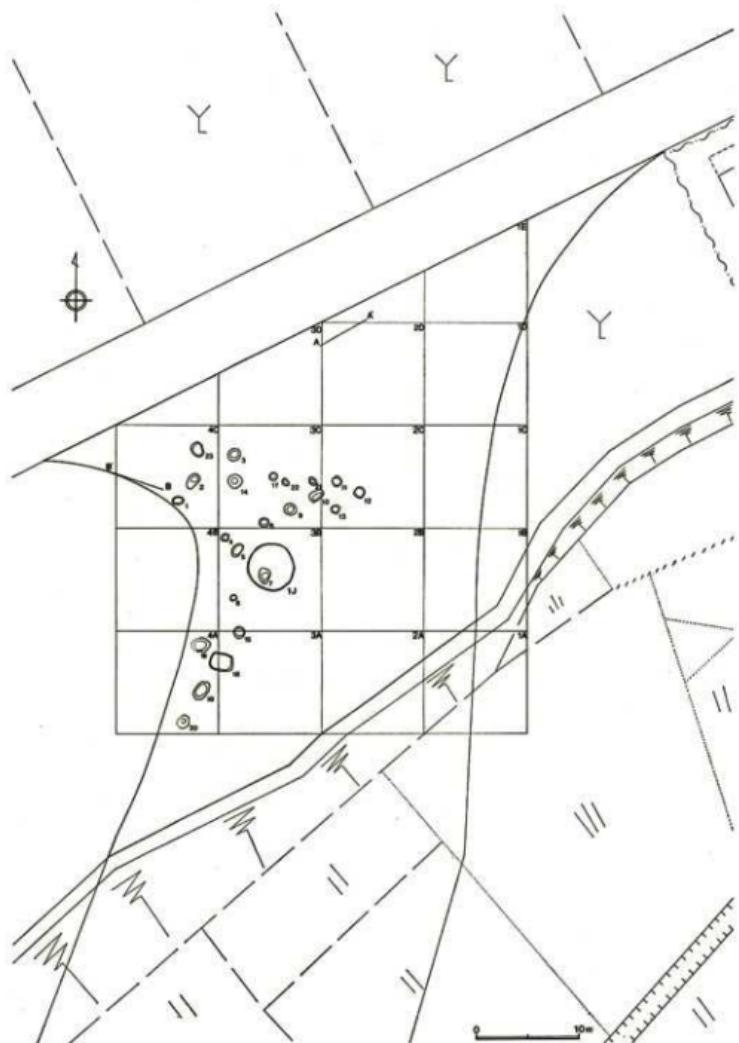
第4層 褐色ないし暗褐色をしたかなり砂質に富んだ土層である。第3層よりさらに多くの礫を含んでおり、しまりは全くない。断面を切る際にも大部ボロボロと崩れた程である。土器片も若干含む。部分的にみられる土層であり、自然の堆積とは思えないふしもある。

ほぼ基本層序は以上のようなであるが、以下さらに灰褐色砂層と我々が調査時に仮称した、砂利を多量に含んだ土層があり、遺構はその部分で確認された。だが、極めて調査区が小範囲にもかかわらず、遺構確認面の土層は砂質の部分と礫の多い部分が複雑に入り組んでおり、調査に困難をきたした。段丘地形の特徴であろうか。黄褐色のローム層は全く認められなかった。

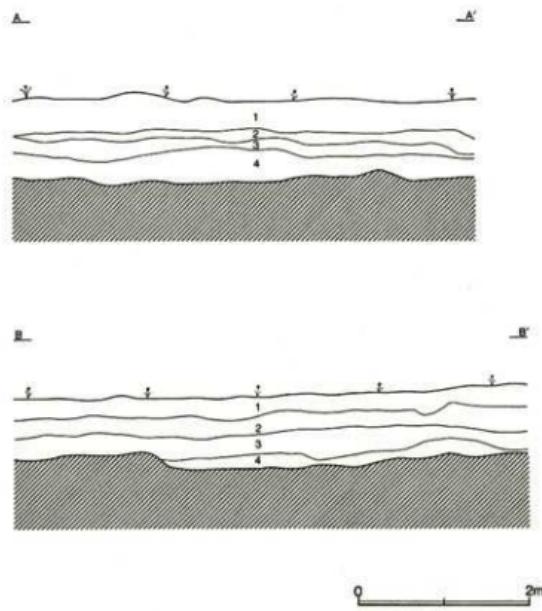
(鈴木 敏昭)



第3図 遺跡の拡がり（推定）と140号バイパス予定路線図



第4図 発掘グリッドおよび遺構分布図



1. 明茶褐色耕作土層 2. 黒茶褐色土層
3. 黒褐色土層 4. 暗褐色土層

第5図 土層図 水条レベルは標高75.00m

IV 調査の経過

1月16日 現地で発掘調査対象部分の確認をした後、担当者の立ち合いのもとで、重機による表土の除去作業に入る。そして、グリッドの設定をする。

1月17日 手作業による遺構確認の為の表土剥ぎに入る。礫の含有量が異常に多い部分もあり、調査に前途多難を思わせる。1E、1D、2D、3D、4D、1Cの各グリッドと2Cの一部が剥ぎ終わる。本日の遺物出土量は極めて貧弱であり遺構の検出はなかった。

1月18日 遺構確認作業。2C、3C、4C、5C、1B、2B、3Bの一部まで進む。昨日に比べ、本日の遺物出土量は4Cグリッドを中心に夥しいものがあった。とりわけ、完全に口縁部のめぐる2個体の土器を埋設した1号土壙の検出は作業員の士気昂揚につながった。他にも、3号とした焼石による集石土壙をはじめ13基の土壙が検出された。

1月19日 表土剥ぎが終了する。3Bグリッドにおいて唯一の住居跡が検出された。土壙はさらに8基増える。つまり、本日の段階では、住居跡が1軒と土壙が22基検出されたわけである。

1月22日 土壙の発掘に入る。1号土壙の平面図とセクション図、3号土壙の集石を含む平面図とセクション図をとる。

1月23日 引き続き土壙の調査。並行して住居跡の調査にも入る。遺物の出土は少なく、一日で完掘する。炉、柱穴も検出不能だった。当住居跡はさらに7号土壙にも切られていた。

1月24日 継続して土壙の調査。A-A'のセクションをとる。

1月25日 継続して土壙の調査。B-B'のセクションをとる。

1月26日 土壙を掘り進める。完掘順に今日から写真撮影に入る。1号、2号、3号、14号、17号、22号、23号土壙まで終了。

1月29日 土壙の発掘と写真撮影。6号、9号、10号、11号、12号、13号、21号土壙まで終了。

1月31日 土壙の発掘は20号を最後に完了し、今日からは実測と写真撮影に専念する。撮影は4号、5号、7号、8号、15号、16号の各土壙と1号住居跡が終わる。実測は1～3号、6号、9号、14号、17号、22号、23号土壙の平面図及びエレベーションをとる。

2月1日 18～20号土壙の写真撮影をする。7号、10～13号、21号土壙及び1号住居跡の平面図とエレベーションをとる。

2月2日 4号、5号、8号、15号土壙の平面図及びエレベーションをとる。

2月5日 16号、18号、19号、20号土壙の平面図及びエレベーションをとる。さらに、全体を清掃後、調査区の全景写真をとる。

2月7日 図面の総点検をし、不備な部分の補正と修正を加え、全ての作業を終了させる。

(鈴木 敏昭)

V 遺構と出土遺物

1. 遺構

遺構は、住居跡1軒、土壙23基が検出された。第4図のように分布している。これらの遺構は第4層上面及び4層が部分的に欠けている場所では地山の砂利を多量に含む砂層で検出された。4層も非常に疊を多く含む層のため、遺構写真にみられるように疊・小石等が露出しているが実測図としては表現していない。プランは、疊を含む層中に黒色の落ち込みを呈するため比較的確認しやすかった。

検出された23基の土壙を、平面形、断面形により、分類をおこなった。あらかじめ分類基準を以下に記しておく。

平面形

- I 円形及び準じる形、長径と短径の比が0.90以上のもの
- II 楕円形
- III 長方形
- IV 不定形

断面形

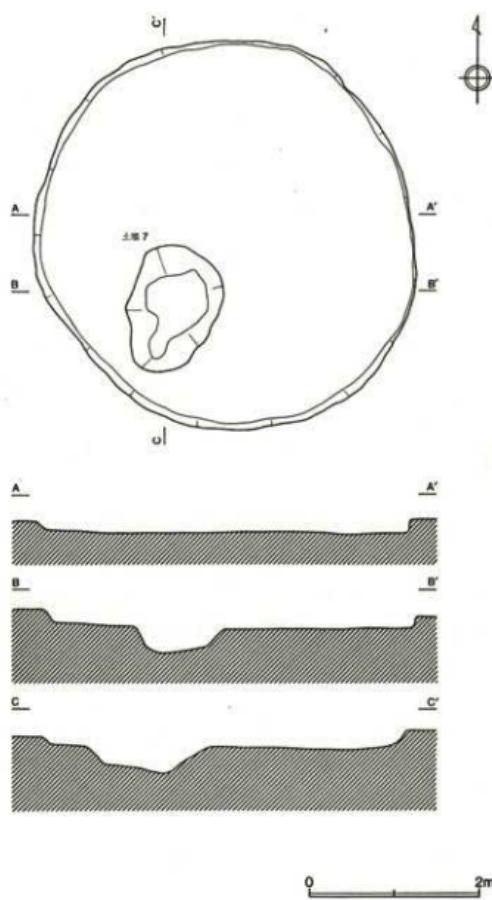
- A 開口部より底部が小さく、逆台形を呈する平底のもの、いわゆる円筒型を含む。
- B 開口部より底部が小さく、立ち上がりが浅く皿状を呈するもの。長径と深さの比が1未満のもの。
- C 二段の底を有するもの
- D 立ち上がりが一方に偏り、底面が丸底状のもの

なお、今回の発掘区は遺跡の南東部の端にあたり、同方向への傾斜がみられる。そこで、土壙の基軸方向から等高線に対する位置関係も調べることにし、個別の説明中に記載した。

a 住居跡

第1号住居跡（第6図）

3Bグリッドにおいて検出された。本遺跡の南東に位置し、これより外側には、遺構は確認されなかった。遺物の散布状態、地形等からも集落の端に位置する住居跡と思われる。本住居跡は第7号土壙によりきられていた。床面は平らであるが、砂利層に掘り込まれているため、小石が露出しており、軟弱である。従って、柱穴、炉址等は検出不能だった。壁高は斜面のため、南側が浅く、10~20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるがらしい。遺物は縄文中期の土器が30片、石器が打製石斧3点、石鏃1点出土している。



第6図 第1号住居跡 水准レベル73.90m

b 土 壤

第1号土壌（第7図）

4 C グリッドで検出された。プランはII—B型である。長径 $1.15m \times 0.79m$ 、深さは $16cm$ を測る。長軸方向はN—90°—Wを示し、等高線に対して斜位に位置する。

本土壌は、胴下半を切断した深鉢が正位の状態で並べられていた。また、約 $20cm$ 離れた南側には胴上半が復原された土器があり、この地区に土器片が、總破片数の $\frac{1}{3}$ 強を占める程集中していた。そのため、住居跡の可能性も考えられ、埋甕としての用途が考えられたため、B—B'のセクションをとったが、掘り込みのプランは確認できなかった。他の遺物は検出されなかった。

第2号土壌（第7図）

4 C グリッドにおいて検出された。プランはII—D型である。長径 $1.62m \times$ 短径 $1.0m$ 、深さは南側が浅く、最深部で約 $17cm$ を測る。長軸方向はN—28°—Eを示し、等高線に対して並行である。

しかし、堆積状態から、本土壌は風倒木痕と思われる。遺物は縄文中期の土器が6片出土している。

第3号土壌（第7図）

3 C グリッドにおいて検出された。プランはI—B型である。長径 $1.21m \times$ 短径 $1.15m$ 、深さは $27cm$ を測る。長軸方向はN—90°—Wで、等高線に対して斜位に位置する。

本土壌の上面に集石が検出された。これらの礫は割れたり、赤変しており、熱を受けた状態を示していた。また堆積土中にも炭化物粒子を多く含み、炉としての使用が考えられた。縄文前、中期に多くみられる集石炉としての機能が考えられる。集石炉は、住居跡に近接して発見されており、用途として遺物等から屋内の土器を利用した煮沸とは違う、蒸し焼き料理等の施設として考えられるが、非日常的な機能も有していたものかは明瞭ではない。本土壌は他の遺物が検出されなかつたため、用途も詳らかにできない。

第4号土壌（第7図）

3 B グリッドにおいて検出された。プランはI—B型である。長径 $0.78m \times$ 短径 $0.73m$ 、深さは $20cm$ を測る。長軸方向はN—90°—Wを示し、等高線に対して、斜位に位置する。遺物は検出されなかつた。

第5号土壌（第7図）

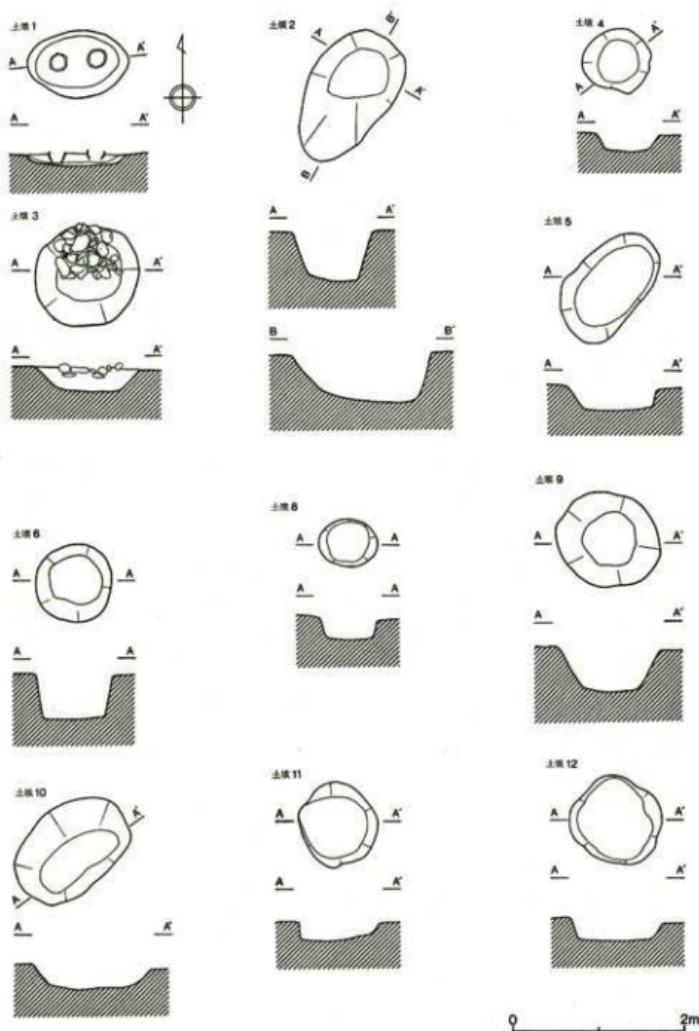
3 B グリッドにおいて検出された。プランはIII—B型である。長径 $1.4m \times$ 短径 $0.82m$ 、深さは $24cm$ を測る。長軸方向はN—41°—Eを示し、等高線に対して並行に位置する。遺物は縄文中期の土器が7片出土している。

第6号土壌（第7図）

3 C グリッドにおいて検出された。プランはI—A型である。長径 $0.9m \times$ 短径 $0.88m$ 、深さは $50cm$ を測る。円形のため長軸方向及び等高線に対する位置に関しては述べられない。遺物は縄文中期の土器が3片出土している。

第7号土壌（第7図）

3 B グリッド、1号住居跡内において検出された。堆積状態から本土壌が住居跡をきっているた



第7図 土壤実測図(1) 水位レベル73.90m

め新しい。プランはIV-C型である。長径1.5m×短径1.04m、深さは35~54cmを測る。長軸方向はN-17°-Eを示し、等高線に対して並行である。遺物は縄文中期の土器が1片出土している。

第8号土壙（第7図）

3Bグリッドにおいて検出された。プランはII-B型である。長径0.68m×短径0.55m、深さは25cmを測る。長軸方向はN-90°-Wを示し、等高線に対して斜位に位置する。遺物は縄文中期の土器が、片出土している。

第9号土壙（第7図）

3Cグリッドにおいて検出された。プランはI-A型である。長径1.19m×短径1.1m、深さは55cmを測る。長軸方向はN-90°-Wで、等高線に対して斜位に位置する。遺物は検出されなかった。

第10号土壙（第7図）

2C・3Cグリッドのライン上に検出された。プランはII-D型である。長径1.37m×短径0.99m、深さは29cmを測る。長軸方向はN-54°-Eで、等高線に対して並行に位置する。遺物は縄文中期の土器が12片出土している。

第11号土壙（第7図）

2Cグリッドにおいて検出された。プランはI-D型である。長径0.99m×短径0.93m、深さは20cmを測る。長軸方向はNを示し、等高線に対して斜位に位置する。遺物は検出されなかった。

第12号土壙（第7図）

2Cグリッドにおいて検出された。プランはI-B型である。長径1.07m×短径0.96m、深さは25cmを測る。長軸方向はN-50°-Wを示し、等高線に対して直交する位置にある。遺物は検出されなかった。

第13号土壙（第8図）

2Cグリッドにおいて検出された。プランはI-A型である。長径0.82m×短径0.9m、深さは36cmを測る。長軸方向はNを示し、等高線に対して斜位に位置する。遺物は縄文中期の土器が2片、石器は打製石斧1点、フレーク1点が出土した。

第14号土壙（第8図）

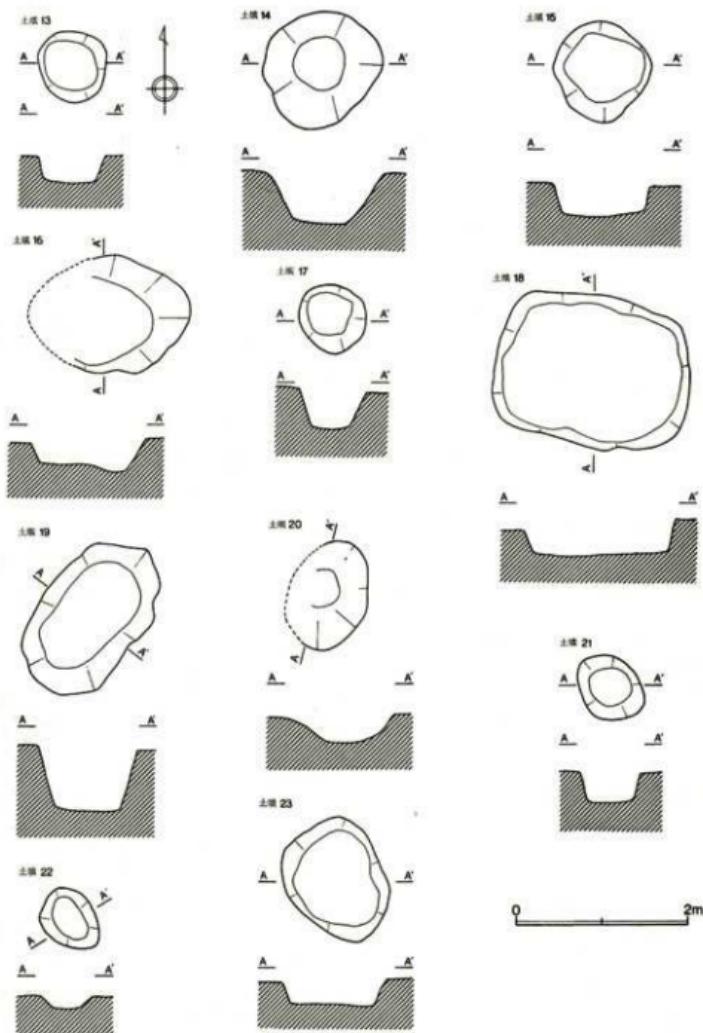
3Cグリッドにおいて検出された。プランはI-A型である。長径1.39m×短径1.34m、深さは36cmを測る。長軸方向はN-90°-Wを示し、等高線に対し斜位に位置する。遺物は縄文中期の土器が14片、石器は打製石斧1点が出土している。

第15号土壙（第8図）

3A・3Bグリッドのライン上において検出された。プランはI-D型である。径は1.16m×1.16m、深さは36cmを測る。円形のため、長軸方向及び等高線に関しては述べられない。遺物は縄文中期の土器が15片出土している。出土石器は3点。

第16号土壙（第8図）

4Aグリッドにおいて検出された。造構が発掘区域外に及んだため全掘できなかつたが、プランはII-C型を呈すると思われる。長径1.97m×短径1.34m、深さは23~36cmを測る。長軸方向はN-90°-Wを示すと思われる。等高線に対して斜位に位置する。遺物は検出されなかつた。



第8図 土壌実測図(2) 水系レベル73.90m (土壤16・18~20は73.70m)

第17号土壙（第8図）

3Cグリッドにおいて検出された。プランはI-A型である。長径0.8m×短径0.77m、深さは44cmを測る。長軸方向はNを示し、等高線に対して斜位に位置する。遺物は縄文中期の土器が22片出土している。

第18号土壙（第8図）

3A、4Aグリッドのライン上において検出された。プランはIII-B型である。長径2.28m×短径1.76m、深さは25~33cmを測る。長軸方向はN-75°-Wを示し、等高線に対して直交する位置にある。遺物は縄文中期の土器が32片出土している。

第19号土壙（第8図）

4Aグリッドにおいて検出された。プランはII-A型である。長径は1.95m×1.17m、深さは70cmを測る。長軸方向はN-41°-Eを示し、等高線に対して並行に位置する。遺物は縄文中期の土器が73片、石器は打製石斧1点、フレイク1点が出土している。

第20号土壙（第8図）

4Aグリッドにおいて検出された。遺構は発掘区域外にも及んだため全掘できなかった。プランはII-D型を呈すると思われる。長径1.29m×短径0.95m、深さは30cmを測る。長軸方向はN-14°-Eを示し、等高線に対して並行に位置する。遺物は縄文中期の土器が2片出土している。

第21号土壙（第8図）

3Cグリッドにおいて検出された。プランはII-A型である。長径0.88m×短径0.68m、深さは35cmを測る。長軸方向はN-47°-Wを示し、等高線に対して並行に位置する。遺物は検出されなかった。

第22号土壙（第8図）

3Cグリッドにおいて検出された。プランはII-B型である。長径0.8m×短径0.57m、深さは17cmを測る。長軸方向はN-39°-Wを示し、等高線に対して直交する位置にある。遺物は検出されなかった。

第23号土壙（第8図）

4Cグリッドにおいて検出された。プランはII-B型である。長径1.4m×短径1.1m、深さは27cmを測る。長軸方向はN-36°-Wを示し、等高線に対して直交する位置にある。遺物は検出されなかった。

以上の遺構の多くは、遺物の出土が皆無か、あるいは少ないために時期決定に不明瞭さを残すところがある。従って、全てが下南原集落に所属していたと断定し得る根拠は乏しいと言わざるを得ない。だが、集落の南東端部としての位置付け、役割等は、今後、下南原集落の全貌が発掘調査等により、明らかにされた時点で、時期の問題に矮少化されない、別の時限での重要さが増すことと思われる。

（小島糸子）

2. 遺構出土遺物

土器、石器共に出土量が豊富とは言えない。土器片などはむしろ微細なものが多く、時期判定等に困難が伴うことが多かった。だが第1号土壙出土の2個体の胴上半部深鉢は以下に詳述するごとく極めて貴重な資料と言える。石器は第1号住居跡で4点検出されたが、その出土状態には特記する点は認められない。

a. 土 器

出土土器については以下のような観察表としてまとめた。ここで観察表の見方について若干触れておく。(1)番号は遺構出土土器の拓影図番号がすべて通し番号となっており、その番号と一致する。また土器実測図に関しては活字をゴチック体に変えた。なお、グリッド出土土器の拓影図は遺構出土土器の拓影図とは別に通し番号が打ってあるので照合の際には注意されたい。(2)分類の項には当報告書で便宜上分けた記号が記入されている。なお、分類は最も多量の土器がまとまって出土した4Cグリッドにおいて基礎的作業を実施しており、分類基準は4Cグリッド出土土器を参照のこと。このことは他グリッドに関してもあてはまる。(3)器形・文様の特徴は、勿論施文工程等の諸特徴も含めて考えている。(4)胎土・焼成・色調等に関しては、主として土器製作技術面での観察事項が記載されている。(5)備考には、その他の特記事項、たとえば出土状態等が記入される。

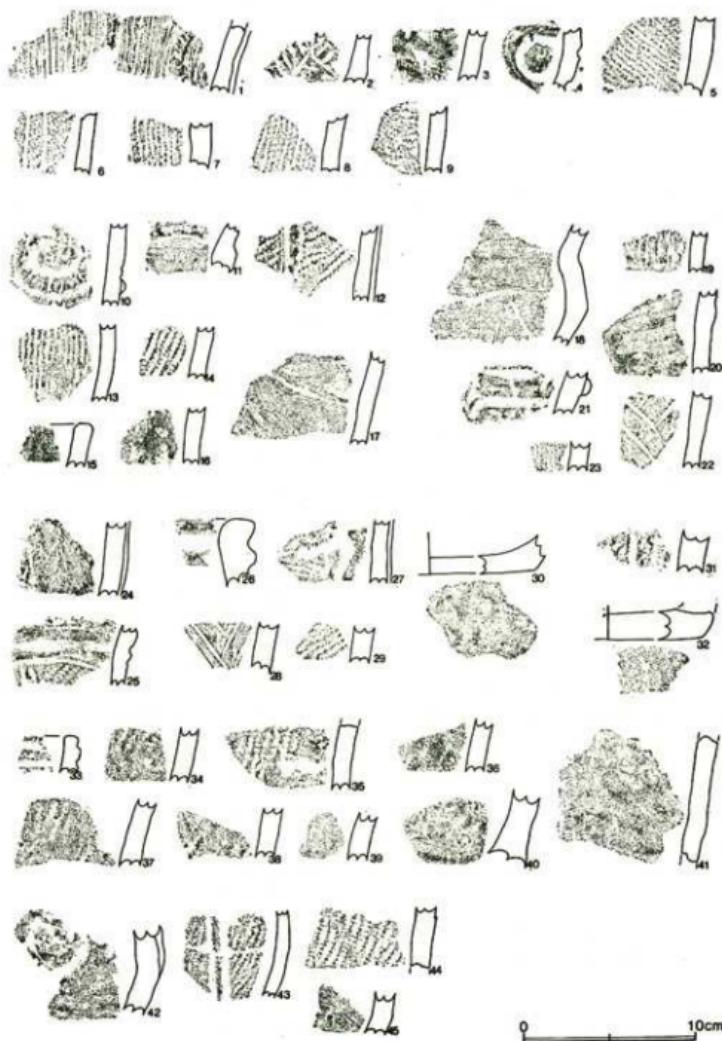
遺構出土土器観察一覧

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備 考
1	III d	深鉢の胴部破片であるが器形の詳細は不明。地文には手裁竹管による条線が縦位に施される。竹管の幅は約0.5 cm。地文施文後、刻みを持つ隆帯が添付される。この上器を特徴づけるモチーフが展開するのであろうが、不詳。この隆帯には両側面をなぞるよう、地文と同じ施文具による平行沈線が引かれている。	胎土には、赤、白、灰等の砂粒がやや多めに含まれている。焼成は良好。色調は内外面共に赤褐色を呈しているが、外面には煤が付着して黒変した部分もある。 破片上部は輪積み部分で剥がれています。	1号住居跡覆土
2	IX	深鉢の胴部破片。竹籠による幾何学文様がわずかに観察されるのみ。	胎土に赤、黒、白、灰等各種の小砂粒がやや多量に含まれているが中でも、片岩質の小礫は目立つ。当地域の特徴となる。焼成は良好。色調は内面が黒、外側が明赤褐色。	1号住居跡覆土
3	IX	深鉢の胴部破片。箆による刺突列が2条認められるのみ。	胎土には片岩質の小礫の他に赤、白、灰、黒の小砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内面が黒、外側が明赤褐色。	1号住居跡覆土
4	IX	深鉢の胴上半部、恐らく口縁部に近い箇所の	胎土は上記3点と殆んど変わらない。	1号住居跡覆土

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
		破片であろう。縁による円文が描かれている。	いたが、砂粒はやや細かい傾向にある。焼成は良好。色調は内面暗赤褐色で、外表面赤褐色を呈する。	土
	IV a	深鉢の胴下半部破片。地文には2段の繩R Lが縦方向に回転施文され、その上には縁による2条の垂線が描かれている。	胎土には小礫がやや多い。含有物は上と同。焼成良好で堅緑。色調は内面が明赤褐色で外表面がぶい赤褐色を呈す。破片上部は輪積み部分で剥離。	1号住居跡復土
6 7 8	X b	いずれも深鉢の胴部破片。地文としての撚糸しが5では斜、7~8ではほぼ縦に転がされているのが観察されるが、他の文様は不明。	胎土の含有物は上と同じで、若干多めに含まれている。焼成良好。色調は5が内面が褐色で外表面が明赤褐色、7~8は両者共に内面が明褐色で外表面が黒褐色。	1号住居跡復土 7~8の外面上には炭化物の付着が顕著
9		深鉢の胴部破片。地文には2段の繩R Lが縦位に回転施文されている。	胎土の含有物は同じだが、砂粒は大きめで多く、内面ではかなり目立つてザラついている。焼成は良好。色調は内面が淡橙色で外表面が灰褐色。	1号住居跡復土
2	IV	口縁に4単位の小突起を配する深鉢形土器で若干内壁する口縁部は胴中央部で一端そぼまる器形を示す。以下は残存しておらず推測の域を出ないが、恐らく図示したように途中でわざかに脛らみながらも底部へ向けて収束するのである。地文には2段の繩R Lが口縁部より一貫して縦位に回転施文されている。文様としてはこの地文上にS字の両端に溝を巻かせたようなモチーフが4箇所の小突起下に斜めに配され、これらの間には内部に円形刺突列を持つ長楕円形状の棒状文が配されている。もっとも、実測図に示した正面部分の溝は他の3箇所の溝とは巻く方向が対立となつており、S字と言えないのだが、詳しくは展開模式図を参照のこと。また、胴中央部にもS字状溝巻の片鱗が一部観察されるが不詳である。なお、沈線間の磨り消しは全然確認されない。口径は20cm。	胎土には比較的粗い赤、白、灰、黒等の小礫を多く含み、現状での手触は良くない。片岩質の小礫を含む点も上と同じ。焼成は良好。色調は内外面共に口辺部は明赤褐色~赤褐色を示し、胴部は黒色味を帯びている。	1号土壤 第31図2の展開模式図と同 欠損部は胴下半と小突起部 分 正位の状態で 次の3と並んで出土
3	VII a	口縁部は内唇し、胴中央部でしづるようにくびれる器形を呈する深鉢である。地文には撚糸しが全面に縦に転がされている。文様は口縁部と胴部に3本の沈線が横位にめぐらされその間には同じく3本単位の連弧状の沈線文様が8単位でめぐらされている。この連弧文様は上部で区画され、下端には3本の垂線が付	胎土に、最大は0.5cmの小礫を含む。全体的に、白、灰、灰黒色の小礫を多く含み、器面の荒れた部分ではザラザラとした質感がある。焼成良好。色調は、内外面共に胴上部は赤味をおびた茶褐色を呈し、くびれ部付近は内外面共に	1号土壤 第31図3の展 開模式図と同 胴下半部を欠 損 正位の状態で 2と並んで出

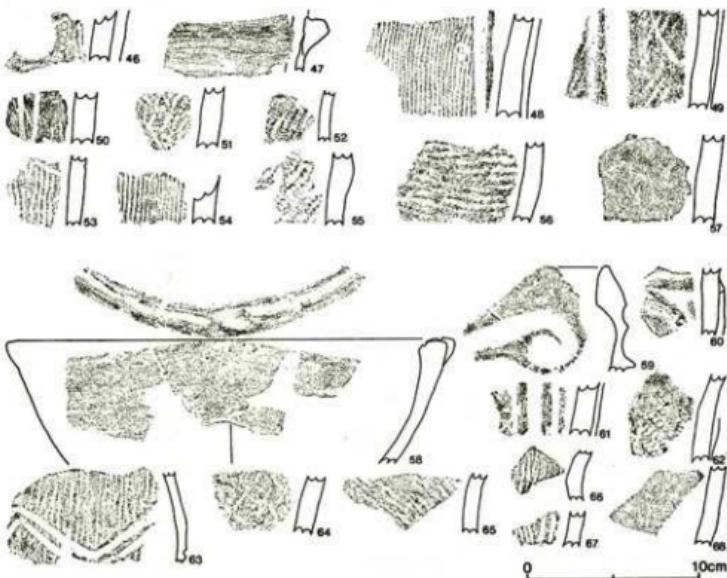
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
		加されている。ところで、沈線はすべてが幅0.6 cmの半截竹管によって描かれている。また、磨り消しの兆候は全く認められず、ただ、沈線を引く際に竹管の内側で部分部に磨り消された部分が発見されたに止まった。口径は20.5cm。	黒変している。	土 口唇部内側に 弱いとは言え 稜を有するの は特徴的。
10	IX	深鉢の胴上半部破片であろう。籠による沈線文様と隆帯による渦文が見られる。隆帶上には籠による刻みがのっている。	胎土、焼成共に上と同。色調は内面が灰黄褐色、外面が明褐色。	2号土壤
11	II	深鉢の口縁部付近の破片。恐らくキャリバー状口縁の下端部破片であろう。文様は不明。	胎土、焼成共に上と同。色調は内面がにぶい橙色で、外面が明赤褐色を呈する。	2号土壤
12	III b	深鉢の胴部破片。地文は2段の繩Rしが縦位に回転施文されている。地文上には蛇行隆帯が同じく縦位に貼り付けられ、隆帯の両側縁には籠によるなぞりが加えられている。隆帯の断面は三角形を呈する。	胎土には小疊から粗砂まで、赤、白、灰、黒等各種を混入する。焼成は良好で堅緻。色調は内面がにぶい橙色で、外面は灰褐色。	2号土壤
13	X b	深鉢の胴部破片。地文としての撫糸しが縦位に転がされている。	胎土、焼成共に同上。色調は内面が黒色、外面が明赤褐色。	2号土壤
14	X a	深鉢の胴部破片。地文には2段の繩Rしが大略縦位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が明褐灰色、外面がにぶい橙色。	2号土壤
15 17	VI	いずれも無文の深鉢の破片。15のみ口縁部で他は胴部。	胎土は17がやや疊の含有が少ないが、15~16は同上。焼成は15が最も良好で堅緻、16~17は普通。色調はいずれも外面はにぶい橙色を呈するが、内面は15、17が黒褐色で16が淡褐色。	2号土壤
18	XI b	浅鉢の胴腹部付近の破片であろう。無文。	胎土の小疊含有量は若干少ない。焼成は良好。色調は内外面共ににぶい赤褐色を呈するが、内面は黒変している部分もある。 腹部最大径より下は籠による削りが左→右に施されており、その後の磨き等ではなく、砂粒の移動痕が顕著である。従って胴腹部には水平に稜ができる。	5号土壤
19	X c	深鉢の胴部破片。文様としては籠による縦沈線が数本観察されるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に明赤褐色。	5号土壤
20	VI	深鉢の胴上部破片と思われるが、全くの無文	胎土、焼成は同上。色調は内面が	5号土壤

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
		不詳。外面には輪積み痕、整形痕等が粗雑に残されている。	褐色で、外面が暗赤褐色。	
21	II	キャリバー状口縁を有する深鉢の口縁部破片で、隆帯区画の一部が見受けられる。隆帯には太めの竈による沈線が添えられている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が橙色で、外面が黒色を呈す。	6号土壤
22	III e	深鉢の胴部破片。沈線による斜線が認められるが、恐らく矢羽状に構成されている文様の部分であろう。地文は無し。	胎土は同上だが、砂粒はやや小さく少なめである。焼成良好。色調は内面が明褐色で、外面がにぶい橙色。	6号土壤
23	X b	深鉢の胴部破片で、地文の燃糸しが観察されるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に灰褐色。	6号土壤
24	III b	深鉢の胴部破片。文様は表面がかなり剥落しており不明瞭だが、地文には2段の繩Rしが縦に転がされているらしい。繩文地上には1本の隆帯が垂下されている。隆帯には沈線が添えられている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が炭化物の付着もあり、黒～黒褐色を呈し、外面は明赤褐色を示す。	7号土壤
25	IV a	深鉢の胴部破片。キャリバー状口縁から、円筒状の胴部へと移行する部分であろう。口縁部と胴部の文様帶を区画する横位の3本の沈線と胴部に3本1単位で垂下する沈線がわずかに観察される。垂線は半截竹管を使用。地文には2段の繩Rしが縦に回転施文されている。	胎土の含有物は同上だが、その量は若干多い。焼成は良好。色調は内外面共ににぶい橙色を呈する。	8号土壤
26	II	キャリバー状口縁を有する深鉢の口縁部破片だが、小破片の為、文様の詳細は不明。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に褐色。	10号土壤
27	III c	深鉢の胴部破片。地文には1段の繩しが縦に転がされ、その上には隆帯が主たる文様として配されている。詳細は不明。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に淡橙色。	10号土壤
28	III e	深鉢の胴部破片。器面には矢羽状の沈線が縦に描かれている。地文は無し。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に淡橙色。	10号土壤
29	X a	深鉢の胴部破片で、器面には2段の繩Rしが縦位回転されるのが観察されるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は内面が褐色で外面がにぶい赤褐色。	10号土壤
30	■	深鉢の底部破片である。文様等は観察されない。	胎土、焼成は同上。色調は内面が黒色、外面がにぶい橙色を呈す。	10号土壤
31	IV a	深鉢の胴部破片。2段の繩Rしが地文として縦位に回転施文され、その上には竈による沈線が2本垂下されている。沈線間は磨り消さ	胎土、焼成は同上。だが、二次的な火熱を受けたらしく、表面の色調は橙色となり、全体的に脆くな	13号土壤



第9図 第1号住居跡(1～9)、第2号土壤(10～17)、第5号土壤(18～20)、第6号土壤(21～23)、
第7号土壤(24)、第8号土壤(25)、第10号土壤(26～30)、第13号土壤(31～32)、第14号土壤
(33～41)、第15号土壤(42～45) 出土土器拓影図

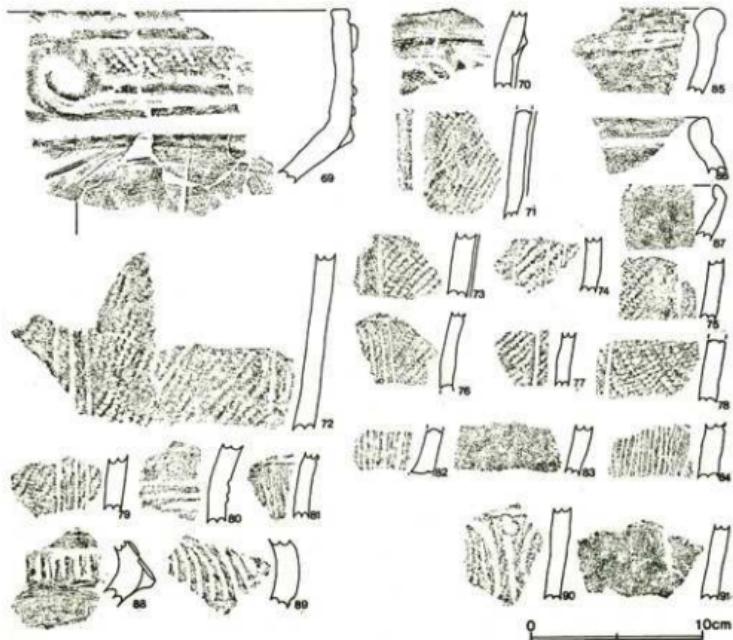
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
		れない。	っている。	
32	XII	深鉢の底部破片。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共にぶい橙色。 底部の円板部分が割離したもの。	13号土壤
33	VII	深鉢の口縁部破片。口唇直下に2本の沈線が横位にめぐらされているのが観察されるが不詳。恐らく連弧文土器の部分破片であろう。	胎土、焼成共に同上。色調は内面が暗赤褐色で外側が黒色。	14号土壤 口唇内側に弱い稜がある。
34 38	X a	いずれも深鉢の胴部破片であり、地文に繩文が施されている。繩文は2段の縄R Lしが縦に回転されたもの。	胎土、焼成は同上。色調はいずれも内外面がぶい赤褐色を示す。	14号土壤
40	XII b	深鉢の底部直上の破片である。地文には撚糸しが縦に回転施文されている。	胎土、焼成は同上で良。色調は内外面共にぶい赤褐色を呈する。	14号土壤
39 41	VII	深鉢の胴部破片であり、無文。39は底部に近い部分の破片であるが、41はあるいは浅鉢の破片かとも考えられるが不明瞭である。	胎土、焼成共に同上で良好。とりわけ41は堅密に仕上げられている。色調は39が内外面共にぶい橙色で、41が内外面共に明赤褐色を呈する。	14号土壤
42	II	キャリバー状口縁を有する深鉢の口縁部破片である。隆帯による渦の部分が観察される。地文等は不明。	胎土には大粒の糠が目立って含まれるが、焼成は良好。色調は内外面共に明赤褐色を呈するが、外側には煤の付着により黒変した部分も認められる。	15号土壤
43	IV a	深鉢の胴部破片。地文には2段の縄R Lしがほぼ縦位に回転施文されている。その上には半截竹管による一対の沈線が垂下されている。	胎土は他の土器と顕著な相違はないが、全体的に脆い器面を呈している。色調は内面が赤褐色で外側が灰褐色を呈する。	15号土壤
44	X a	深鉢の胴部破片。2段の縄R Lしが斜位に回転施文されている。	胎土には極めて多量の小糠が混入している。焼成は良好。色調は内外面共に明赤灰色。 輪積み部分での割離資料である。	15号土壤
45	VII	深鉢の胴部破片。無文で、横方向の整形痕が観察されるのみ。	胎土、焼成は普通。色調は内面が黒色で外側が赤褐色。	15号土壤
46 47	II	キャリバー状口縁を有する深鉢の口縁部破片である。46は丁度、渦を巻く部分にあたる。隆帯上には円形竹管の刺突列が見られる。47は口縁部文様帶の下端で文様帶を画する隆帯が観察される。両者ともに地文は不明。	胎土、焼成は同上。色調は46が内外面共に赤橙色で、47の外側は橙色を呈する。	17号土壤



第10図 第17号土壤(46~57)、第18号土壤(58~68) 出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・色 成・色 調 等	備 考
48	III c	深鉢の胴部破片。地文には撚糸しが縦位に回転施文されている。垂下される隆帯には沈線が添えられる。隆帯断面はほぼ台形である。	橙色で、外面が赤褐色。	17号土壤
49	III b	深鉢の胴部破片。地文は2段の繩R Lか縦に回転施文されている。隆帯は2本一対で垂下され、隆帯間の磨り消しは施されない。また隆帯に沿う沈線も認められない。隆帯断面はカマボコ状に近い。	胎土の砂粒多い。焼成良好。色調は内面が黒色で、外面が橙色に近い明赤褐色。	17号土壤 土器内面への炭化物の付着が頗著
50	IV b	深鉢の胴部破片。撚糸しを地文とした上に縦による沈線が垂下されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が明褐灰色、外面がぶい橙色。	17号土壤
53	VII a	深鉢の胴部破片。おそらく連弧文土器の一部分である。地文には撚糸しが縦に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が暗赤褐色で、外面が明赤褐色。	17号土壤
51 52	X a	深鉢の胴部破片。繩文のみの土器を括した。いずれも2段の繩R Lが52を除いて縦方向に	胎土、焼成は同上。色調は55が内外面共に赤褐色を呈するが、他は	17号土壤

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
55 56		転がされている。52は斜め方向への回転施文である。	すべて灰赤色～にぶい橙色を呈している。	
54	X b	深鉢の胴部破片。撚糸しが縦位に回転施文されている。	胎土・焼成は同上。色調は内面が極暗赤褐色で、外面が赤灰色。	17号土壤
57	XI b	無文の破片で詳らかではないが、おそらく浅鉢の一部であろう。	胎土には若干大きめの小礫を含むが、堅緻に焼き上げられている。色調は内面が黒色、外面が灰赤色を示す。	17号土壤
58	VII	小波状を呈する深鉢の口縁部破片であり、無文。口唇上には1本の籠による沈線が引かれ小波状部でその先端が若干巻かれる。	胎土に赤、白、灰、黒色等の砂粒を混入する点は同上。焼成も良好で堅緻。色調は内面が暗赤灰色、外面が暗赤褐色。	18号土壤 口唇部が肥厚し、内側に若干の稜を持つ
59	II	キャリバー状口縁を有する深鉢で、口縁部の小突起下破片。粘土を貼り付け肥厚した部分に幅広の太い沈線で渦が巻かれる。地文は不明。	胎土・焼成は同上。色調は内外面共、にぶい赤褐色。	18号土壤
60	III c	深鉢の胴部破片。横位にめぐらされている隆帯下に胴部文様帯が配される。その一部である蛇行隆帯の垂下が認められる。隆帯断面はカマボコ状。地文には撚糸しが縦位に回転施文されている。	胎土・焼成は同上。色調は内面が極暗赤褐色で、外面が暗赤褐色。	18号土壤
61 62	III b III a	60と殆んど同じ部分の破片。61は2本一対の隆帯が、62は1本（たぶん2本と思われる）の隆帯の垂下がみられる。どちらの隆帯も断面カマボコ状を呈し、沈線が添えられている。地文は61に2段の繩R L、62にL Rが縦に回転施文されている。	胎土・焼成は同上だが、61は二次加熱を受け脆弱となっている。色調は61が内外面共に橙色で、62は内面が褐灰色、外面が炭化物の付着で黒色を示す。	18号土壤
67	IV b	深鉢の胴部破片。地文上に半截竹管による平行沈線が垂下されている。地文には撚糸しが縦に回転施文されている。	胎土・焼成は同上。色調は内面が黒褐色、外面が暗赤褐色を示す。	18号土壤
63	VII a	深鉢の胴下半部の破片で、器形は第20図3と同じであろう。撚糸しが地文とした上には飽による2条の連弧状文が配されている。	胎土・焼成は同上。内面の整形は極めて良好。色調は内外面共に明赤褐色を呈する。	18号土壤
64 66	X a	深鉢の胴部破片で、繩文が施文されたものを一括した。いずれも2段の繩R Lが転がされている。	64の胎土が少し不良な他は焼成と共に同上。いずれも内外面共に橙色の色調を示す。	18号土壤
68	X c	深鉢の胴部破片。器面には浅く細い集合条線が満遍無く縦に引かれている。	胎土・焼成は同上。色調は内外面共に褐灰色。	18号土壤



第11図 第19号土壌(69~89)、第20号土壌(90~91) 出土土器拓影図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
69	I	4(第20図)と同じ。推定口徑32cmを測るキャリバー状口縁の深鉢である。口縁部文様帶には隆帯による渦巻と棹状文を基調としたモチーフが単位文化して配される。地文には3段の縄R L Rが横間に回転施文されている。頭部は無文帶。胴部は不明。なお、隆帯には沈線が添えられている。隆帯は扁平であり、立体感薄い。隆帯貼付は繩文施文後である。	胎土には赤、白、灰、黒色等の砂粒をやや多めに含む。焼成は良好で堅緻。色調は内面が赤褐色で、外面が暗赤褐色。輪積みの粘土縁の幅は約3cmであることが断面から観察される。	19号土壌 3段の縄は他に2点検出されている。
70 71 73	Ⅲ b	キャリバー状口縁を有すると思われる深鉢の胴部破片であり、隆帯が乗下されているものを一括した。隆帯は70、73が断面カマボコ形で、71は断面三角である。いずれにも沈線が添えられている。地文には、いずれも2段の	胎土、焼成は同上。色調は70が内外共に橙色で、71、73が内外共に灰赤色を呈する。	19号土壌

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
		縄 R L が縦位に回転施文されている。なお、70は69同様頸部無文帯を持つ。		
72 • 74 • 78 • 80	IV a	深鉢の胴部破片であり、竈による沈線が垂下されているものを一括した。2本ないし3本が一般的である。沈線間の幅は狭く、意識的な磨り消しが施されたと判断される資料はない。いずれも地文には2段の縄 R L が縦方向に回転施文されている。	胎土、焼成は同上で一般的。色調は73が内外面共に明褐色、76の外面が黒褐色の他は、ほぼ明赤褐色である。77は内面が黒色で、外側がにぶい橙色を呈している。	19号土壤
79 • 81	IV a	深鉢の胴部破片で、文様モチーフその他は殆んど前項と同じだが、沈線が半截竹管によるという点で他と区別される。やはり、沈線間への意識的な磨り消しは加えられていない。	胎土、焼成は同上。色調は79が内面が灰褐色で、外面が明赤褐色、81は内面が赤褐色で、外面がにぶい赤褐色を呈する。	19号土壤
82	IV b	燃糸を地文とした土器で、深鉢の底部直上部分の破片である。竈による2本の沈線が垂下されている。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共ににぶい橙色を呈する。	19号土壤
84	VII a	深鉢の胴部破片。連弧文土器である。地文には燃糸しが縦位に施文されている。	胎土、焼成は一般的。色調は内外面共に灰褐色を呈する。	19号土壤
83	X a	深鉢の胴部破片。地文には2段の縄 R L が縦位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が灰褐色で、外面がにぶい橙色。	19号土壤
85 • 87	VI	深鉢の口縁部破片で文様等が認められない。85は肥厚しながら若干内側する口縁形態を示し、口唇内側には稜を形成している。86は内側した口縁部が口唇部に到り外折ぎみに直立する口縁形態を示す。87は口唇部が逆「く」の字状に内折する形態を示す。	胎土、焼成は同上で一般的。色調は87の内面が灰褐色をしている他はほぼにぶい赤褐色を呈している。	19号土壤 85の口縁裏に丹塗りの痕跡が残されている。
88	XI a	浅鉢の胴部中央の屈曲部分の破片。屈曲上部には竹管状工具によると思われる短沈線が縦に引かれている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が暗赤褐色、外面が灰赤色を示す。	19号土壤
89	VII	内側する口縁部を有する深鉢の口縁部破片。文様は竈による弧線が連続的に描かれ、文様帯を充たしている。拓図下端には口縁部文様帯を区画する横の沈線も見られる。	胎土、焼成は同上。色調は内面が赤灰色で、外面が赤黒色を示す。	19号土壤 重弧文土器
90	IX	深鉢の胴部破片。竈による沈線文様が描かれているが、モチーフ等は不詳。地文には2段の縄 R L が斜位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が暗赤灰~淡橙色で、外面が赤灰色を呈する。	20号土壤
91	VI	深鉢の胴部破片と思われる。無文。	胎土の砂粒は若干多いが、含有物は同上。焼成良好。色調は内面がにぶい褐色、外面が明赤褐色。	20号土壤

b. 石 器

出土した石器は全て圓化した。土器同様に極めて貧弱である。最も多く検出された打製石斧ですら19点と少ない。遺構出土のものはわずか5点である。

さて、個別の説明に入る前に、あらかじめ打製石斧に関しては分類基準を明確に示しておきたい。

I類 両側縁がほぼ平行になるもの

I-a 扱りを持たないもの

I-b 浅い扱りを持つもの

II類 頭部幅の方が狭く、刃部に向かって直線的に開くもの

II-a 幅狭で全長が長く、頭部が尖り、縦長の二等辺三角形状を呈するもの

II-b 前頬とほぼ同じだが段のつくもの

II-c 幅広で全長が短かく、頭部が尖り、二等辺三角形状を呈し、小形のもの

II-d 幅広で全長が短かく、頭部の尖らないもの

III類 ほぼ胸部中央に扱り込みを持つもの

III-a 大きく深い扱り込みを持つもの

III-b 小さく浅い扱り込みを持つもの

以上の分類基準はグリッド出土の場合にも当てはまるので後章では繰り返さない。

第1号住居跡（第23図1～3、第27図22）

1. 打製石斧(I-a) 刃部の欠損した資料である。両側縁はほぼ平行し、頭部近くには自然面が残されている。敲打しない磨滅痕は、左側縁ではやや上、右側縁では下によった部分に認められる。剝離を加える基本的な順位は両面とも上→下へという方向性をとる。

2. 打製石斧(II-a) 上部幅が狭く縦長の形態をとる。刃部は弧状をなすが、幅はあまりない。片面には大きな剝離が加えられておらず、自然面が多く残る。刃部は鋭く「V」字状を示す。側縁に関しても同様である。磨滅痕等は殆んど観察されないが、刃部の鋭さが保たれている事実と関連があるのだろう。剝離の順位は上→下を基本としている。

3. 打製石斧(II-a) 刃部を含む下半分が欠損している。片面には大きな剝離は全く加えられず自然面を残す。側縁には細かな刃済し状の連続剝離が加えられる。剝離の基本順位は上→下となっている。

22. 石鎌 先端部を欠損するが、ほぼ二等辺三角形を呈する。丹念な押圧剝離が加えられているが、やや分厚い。本遺跡で唯一の出土資料である。

第13号土壙（第23図4、第27図23）

4. 打製石斧(II-d) 頭部の幅は狭く、刃部に向かうにつれて両側縁は開き、刃部は弧状を呈する。片面に自然面が残される。刃部は潰れており鈍い。剝離は上→下、左→右という基本的な方向性が認められる。

23. 剥片 黒耀石製であり、透明度は比較的良好。下端部は折損している。

第14号土壤（第23図5）

5. 打製石斧(II-b) 頭部の幅が狭く、刃部に向かって開く。途中に段が作出されている点は注目される。段の部分の磨滅は激しい。柄擦によるものであろうか。刃部には磨滅があり鋸さはない。片面には自然面が残される。剝離順位は大凡上→下である。

第15号土壤（第23図6、第24図7、第27図24）

6. 碎石 非常に分厚く、重量感のある石器で、主要な剝離は正面から裏面へ向けて加えられている。使用痕らしき磨滅痕は裏面の左側縁にのみ認められる。

7. 敷石 20cmを越える比較的扁平で大きな石を使用している。裏面は若干くぼんでいる。敷打部はやや幅広で厚みのある下端を中心に側面の中央部近くまで認められる。

24. 石核 上端から下方へ向かう数条の剝離痕が認められる。

第19号土壤（第24図8、9）

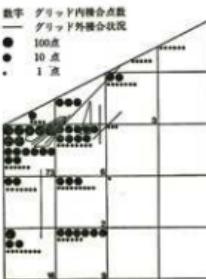
8. 打製石斧(I-a) 左右の両縁はほぼ平行するが、右側縁には自然面が帯状に残されている。磨滅痕は刃部直上の両側縁部に観察される。成形の際の剝離は裏面右側縁が下→上で、他の部分に関しては上→下を基本順位としている。横断面は台形状を呈する。

9. 剥片 加擊は剥片裏面の観察から右斜め上方より加えられたことが明らかである。断面は三角形を呈し、一部に自然面を残す。

(松村和男)

3. グリッド出土遺物

遺構の検出状況からも推察されたように、下南原集落の主体は、今回の発掘区を限界に西方に広がっていることは誤りない事実と思われる。そのことは遺構を無視した形での遺物の出土量の多寡からも裏付けられる。すなわち、遺物は発掘区の西方に向かうにつれて出土量が激増するのである。中でも 4 C 区を中心とする箇所は夥だしい程の出土量を示し群を抜く。出土遺物の時期も纏まっている点、大形破片が目立つ点、同一グリッド内での接合資料が多い点などから、あるいは住居跡が存在しているのではないかとの疑いも持たれたが、その証跡を検出すことができず不分明に終わった。いずれにしろ、集落の中心部が近いことを思わせる一事であろう。



第12図 遺物の検出状況

a. 土 器

土器についての説明は、以下のとく観察表によった。観察表の見方は遺構出土土器に準ずる。

グリッド出土土器観察一覧

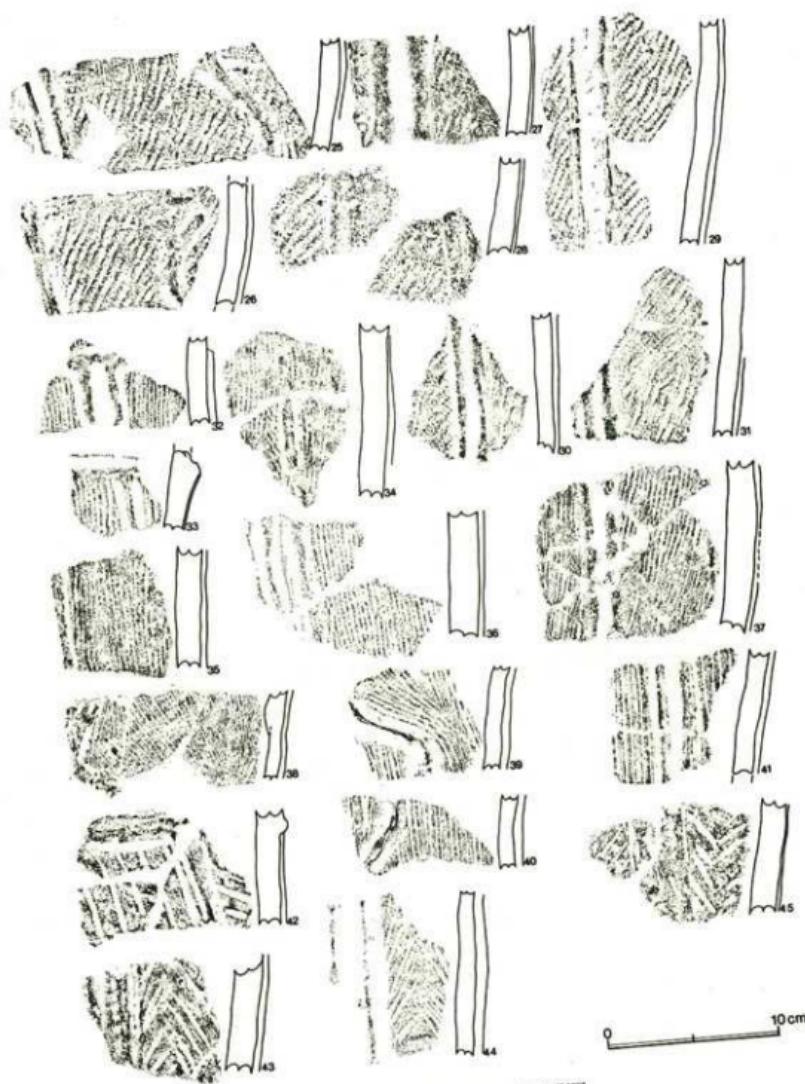
番号	分類	器 形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
1	I	キャリバー状口縁を有する深鉢で、口縁部文様帶の下に頸部無文帶を配する。無文帶部分には縦の鉢形が施されている。口縁部文様帶には隆帯による渦と棹状文が交互に配されるのが一般的なようであるが、当資料は、渦の部分が剥落しており不明となっている。棹帶には沈線が添えられている。棹内には 2 段の櫛 R しが横位に回転施文されている。キャリバーの内縁度はあまり強くない。なお、施文順位は < 繩文施文 → 隆帯貼り付け → 沈線 > である。	胎土には最大が 0.6 cm の小礫をはじめ、赤、白、灰、黒色等各種の砂粒を混入する。片岩質の砂粒の含有は少ない。焼成は良好で極めて堅緻。色調は内面がぶい赤褐色を基調とし一部、暗赤灰色の部分を有し、外表面は赤褐色を呈する。	4 C グリッド
2 5 6	II a	キャリバー状口縁を有する深鉢の口縁部破片であり、口頸部に無文帶を持たないで、口縁部文様帶の溝巻文間の棹状文内が繩文で埋められているものを一括した。繩文は 4 が 2 段の櫛 L R で、他は R L であり、ほぼ横位の回転施文による。だが、2 は縦位回転の資料であり注意されよう。全体的に隆帯は扁平化の傾向にあり、キャリバー部の内縁度は弱い。ところで施文順位については 2 が隆帯部分の見事に割離した資料であり、それによると < 繩	2 の胎土には白、灰、赤、黒色等の砂粒がかなり認められ、片岩質の砂粒も含まれている。他の土器片も殆んどこれに準じている。焼成はいずれも良好で堅緻。色調は表裏面共にいずれも灰褐色を基調としているが、4、6 の外表面は黒褐色を呈している。	4 C グリッド 2 は口唇上にも沈線が引かれている。 2 は隆帯部分の割離資料

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備 考
5	II b	文施文→隆帯貼り付け→沈線→胴部の燃系施文>となることが明瞭に観察される。		
6	II c	同じく、口頸部無文帶を有しないキャリバー形の深鉢形土器である。キャリバー部の内彎度は弱くほぼ垂直に立ちあがる。地文には、燃系 R が継位に施文される。隆帯は比較的扁平で、それは渦巻文についても当てはまる。従って、渦巻は粘土紐が巻いているというよりも太い沈線によって渦巻きが形成されているとさえ見える。渦巻文下には横位の隆帯上に 3 ヶの刺突と、さらに口頸部には 2 本の既沈線による扁平な溝が横に配される。胴部の 2 本一対の懸垂文は同部分からはじまる。8 単位構成。施文順位は<燃系施文→隆帯貼り付け→沈線>。推定口径は 44cm。	胎土は他の土器と比べ、特記するような相違はない。白、灰、黒色等の砂粒を若干多めに含む点も同様である。焼成は良好で堅緻。色調は内外面共に橙～明赤褐色を呈しているが、口縁部と口頸部で色調が突如一線を画して変わることは特記しておきたい。すなわち、浅黄に近い橙色を示す口頸部に対し、口縁部は明赤褐色を呈しているのである。恐らく二次的な火熱によるのであろう。	4 C グリッド 破片による推定復原
1 • 7 15	II d	やはり、口頸部無文帶を持つキャリバー状の深鉢形土器で、5 同様、地文にも燃系を施文する。ただし、燃系は L である。キャリバー部の内彎度も比較的弱い。以上のように基本的には II b 類と殆んど条件が類似するが、本類は、渦巻文が極めて隆起している点で他と決定的に異なる。そして、枠を形成する隆帯は渦巻文間に連弧状に配置される。つまり渦巻文を頂点とした隆帯による連弧状文が 6 単位で器面をめぐるように構成されているのである。以下の胴部文様帶には、渦巻下から 1 本の蛇行沈線が垂らされ、その間には 3 本の沈線による懸垂文が配される。施文順位は<口縁部の横位燃系→隆帯貼り付け→口縁部沈線（あるいは胴部の継位燃系→沈線）→胴部の継位燃系→胴部沈線> と判断される。推定口径は 30cm。	胎土には白、灰、黒、赤色等の砂粒が、若干多めに混入されている。焼成は良好で堅緻。色調は内面が灰褐色を呈し、外表面が明黄褐色を示す。	4 C グリッド 実測図は大形 破片による推 定復原 一部隆帯が剥 落した部分の ある資料



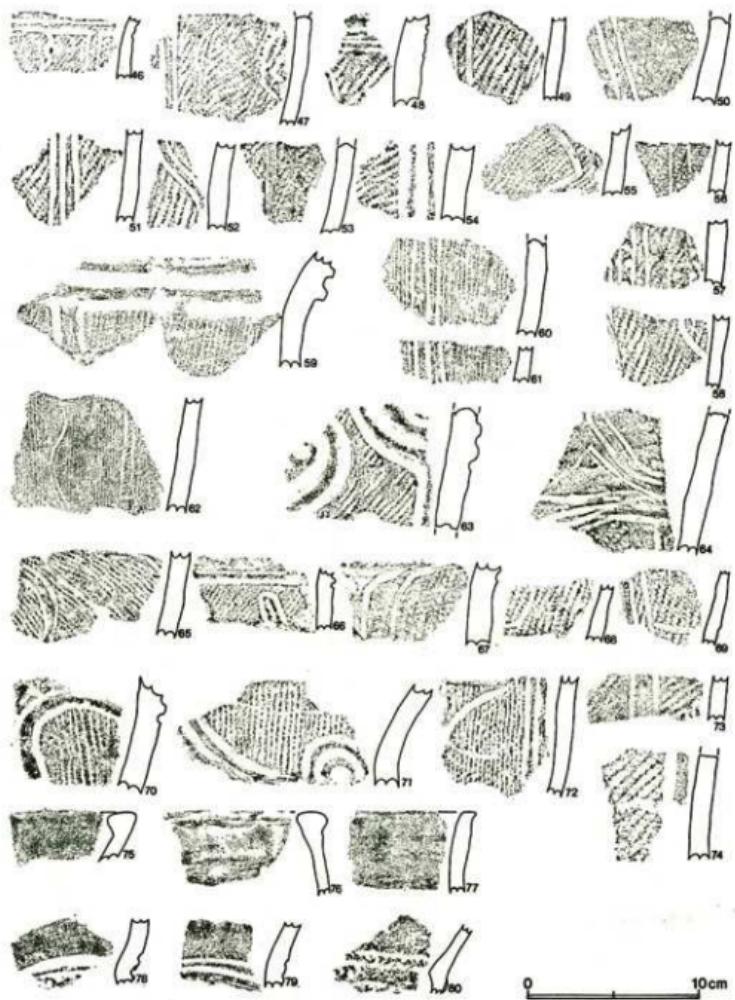
第13図 4Cグリッド出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備 考
		施文順位は<口縁部隆帯・沈線→燃系施文→隆帯による懸垂文→沈線の付加>である。		
16	II e	深鉢の胴部破片で誤りないと思うが、小破片の為、全体の形は推定し難い。文様としては指の押圧が加えられた隆帯と竪による沈線、刺突列が見られる。	胎土、焼成は同上で堅緻に仕上げられている。色調は内外面共に暗赤褐色を呈する。	4 C グリッド
17 20	II	キャリバー状口縁を有すると思われるが、小破片の為、判然としないものを一括。いずれの渦巻も扁平化している。	胎土、焼成は同上。色調は17、18が内面が淡橙色で外面が黒褐色、20は内面が黒褐色で外面がにぶい橙色、19が内外面共ににぶい橙色を呈する。	4 C グリッド
21 22	III a	深鉢の胴部破片で、21と22は同一個体。胴部と口縁部を区画する隆帯が3本横にめぐらされ、ある間隔をおいて隆帯が懸垂される。隆帯断面はカマボコ状で沈線が添えられている。地文には2段の縄L Rが縦に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は内面が褐灰色で、外面が明赤褐色を呈する。 21は破片上部が輪積み部分で剝離したもの。	4 C グリッド
23 31	III b	深鉢の胴部破片であり、基本的には前類と殆んど同じで隆帯による懸垂文が施されているものを一括した。ただし、地文はすべてが、2段の縄R Lの縦回転によっているものである。25、26は同一個体であるが、縄文の他に集合条線の施文も認められる。隆帯断面は全てがカマボコ状で、28以外にはせいぜいなり程度で沈線は添えられていない。隆帯間も意識的に磨り消した痕跡は窺えない。29は隆帯間に地文が明晰に観察される好資料である。	胎土、焼成はほぼ同上と言えるが、28は遺存状況にもよるが、極めて脆弱な資料である。色調は内面については30の黒色を除き、ほぼにぶい赤褐色を基調とし、外面は暗赤褐色～黒褐色を呈している。 26は破片の上下とも輪積み部分で剝離した好資料である。	4 C グリッド
32 37	III c	深鉢の胴部破片で隆帯が垂下するもの。本類は地文に燃系が施文されているものを一括した。燃系はいずれもしである。隆帯断面は全てがカマボコ状。隆帯に沈線が添えられたものは32のみで、他ではない。1の胴部は本類に属する。	胎土、焼成は前類と同じ。色調は32、33が内面が橙色で、外面がにぶい橙色、34～37が全般的に赤褐色を呈している。	4 C グリッド
38 41	III d	深鉢の胴部破片で隆帯が垂下するものの。本類には地文が集合条線であるものを一括した。41は半截竹管による沈線であり特異である。隆帯断面は39、40が三角で、38、41がカマボコ状、いずれも沈線は添えられていない。なお、施文順位は<隆帯貼り付け→集合条線>であることが明瞭に観察される。	胎土、焼成は同上。色調は、38～40は内面が黒褐色で外面が褐灰色を呈し、41は内外面共ににぶい橙色を呈する。	4 C グリッド



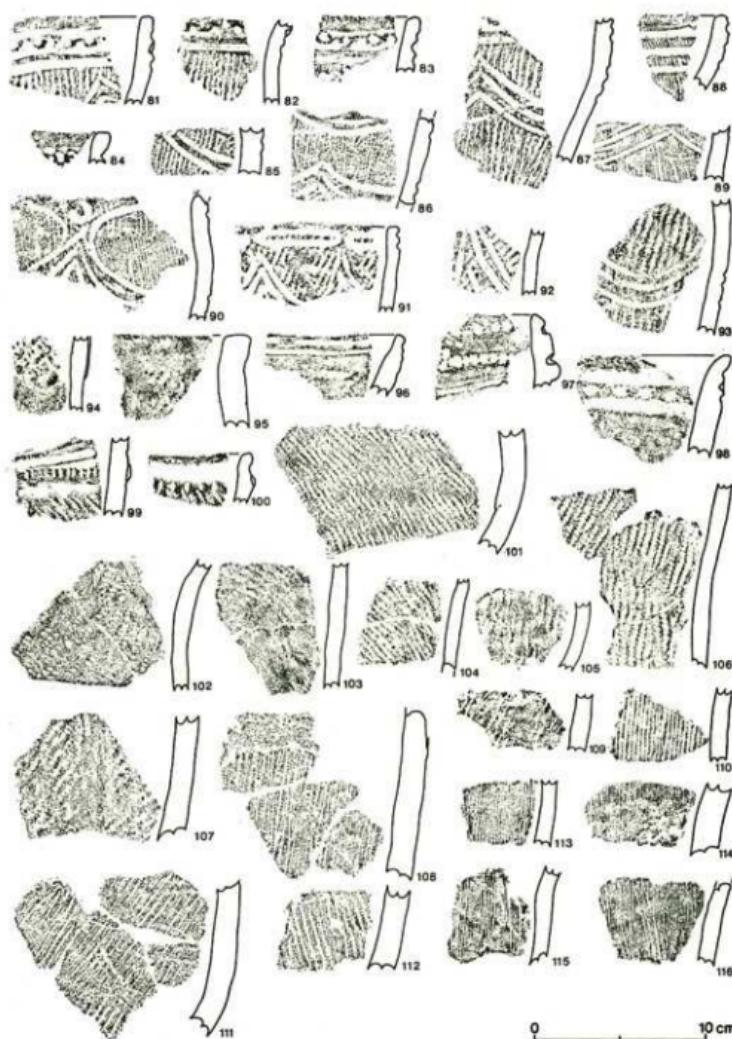
第14図 4Cグリッド出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備 考
42 ↓ 45	III e	深鉢の胴部破片で隆帯が垂下するものという点では前類と共通するが、地文に矢羽状の短沈線が施されているものを一括した。隆帯断面はほぼカマボコ状を呈するが、44はかなり高さのある断面形態を示している。また、44以外には沈線が添えられている。	胎土、焼成は同上。色調は42、43が内外面共に赤褐色で、44が灰褐色を示す。45は内面が黒色で外側が明赤褐色を呈する。	4 C グリッド 45の内面には炭化物が夥しく付着している。
46 ↓ 58	IV a	深鉢の胴部破片である。胴部の懸垂文が隆帯ではなく、沈線によるものを一括した。地文には全てに2段の繩R Lが縦位に回転施文されている。沈線は竈によるものが一般的なようであるが、48、52、53のように半截竹管を使用するものもあり注意される。沈線間への磨り消しは実施されない。沈線の幅は狭いのが一般的。	胎土、焼成は同上。色調は46が他と異なり明赤褐色を呈すが、全体的に赤褐色を呈している。内面が黒色を示すものは51と55の2点ある。 47、50、53は輪積み部分での剝離資料。	4 C グリッド
59	IV b	深鉢の胴部破片。沈線によって懸垂文が施される点は前類と同じだが、地文に撚糸が施されるものを一括。5、6の胴部は本類に当たる。	胎土、焼成は同上。色調は内面には赤褐色の地に、斑に赤褐色の部分が見られ、外側は明赤褐色を呈する。	4 C グリッド
60 ↓ 62	IV c	深鉢の胴部破片。地文に集合条線が縦に配された一群。62の蛇行沈線は半截竹管によるが、他例は竈による。	胎土、焼成は同上で一般的。色調は赤褐色を呈しているが、62の内面は黒色である。 60は輪積み部分での剝離資料。	4 C グリッド
63 ↓ 64 • 66 ↓ 69	IV d	同じく深鉢の胴部破片であるが、単に懸垂文、蛇行沈線のみではなく、詳細は不明だが、ある曲線的なモチーフが施されているものを一括した。各種のバラエティーがあるようであるが、個別の説明は省略。地文には2段の繩R Lが縦位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は67が内面が灰褐色で、外側が黒褐色を呈する。他は全体的に明赤褐色を呈している。 63、64は輪積み部分での剝離資料。	4 C グリッド
65 ↓ 70 ↓ 72	IV e	深鉢の胴部破片。前類と同じ理由で分類項を与えた。地文には撚糸が確認する。65のみ斜走。撚糸は65、71、72がLで、70がRである。	胎土、焼成は同上。色調は71の内面が灰褐色を示す他は、全てが明赤褐色を呈する。	4 C グリッド
73 ↓ 74	V	深鉢の胴部破片。竈沈線による懸垂文が配される点、地文に総位回転の繩文が施される点などIV a類と区別する根拠はないが、沈線間に意識的な磨り消しが加えられる点でその相違点は決定的となる。73には2段の繩R L、74には3段の繩R L Rが施文されている。	胎土、焼成は同上。色調は、73が内面が明褐色で、外側が明赤褐色で、74は内面が明赤褐色で、外側が明褐色を呈する。	4 C グリッド
75 ↓ 80	VI	深鉢で、口縁部が無文のものを一括した。75、78~80は頸部で屈曲する器形を示す。75の口唇部内側は肥厚し、稜が形成される。76は内彎ぎみで口唇部が肥厚し、77は外反する。	胎土、焼成は同上。色調は、77が内外面共に赤褐色を示す他は殆んど灰褐色を基調とする。	4 C グリッド



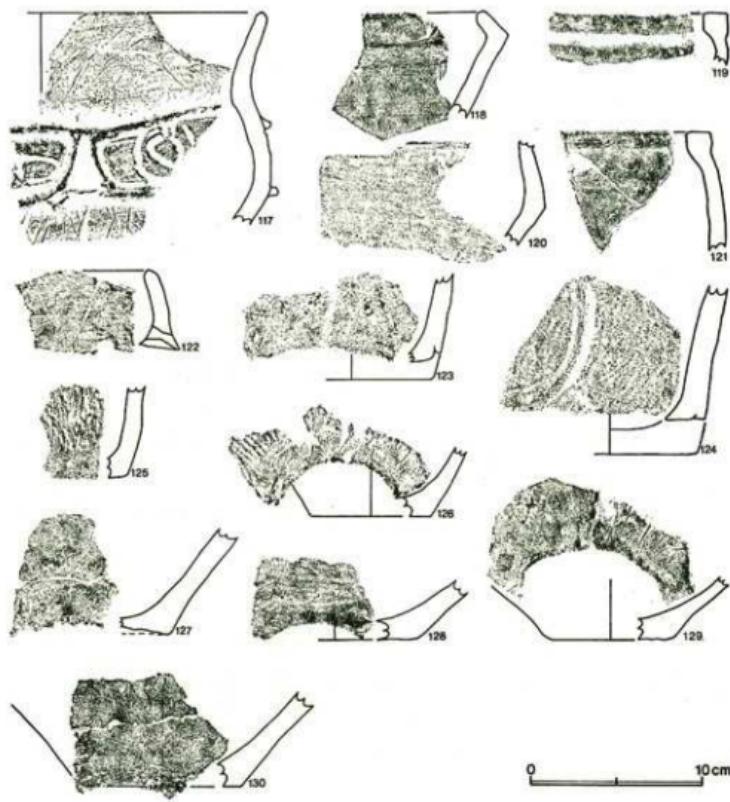
第15図 4C グリッド出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
81 ↓ 87	VII a	深鉢の破片。器形は大略 3 に準ずる。文様としては連弧文が施され、地文に撚糸が巻走するものを一括した。恐らく、81、83、84、87 は同一個体と思われる。口縁部に 3 本の捻糸線がめぐらされ、上の 2 本間に交互刺突が配される。以下には同じく竈による 3 本単位の連弧文が配される。沈線間には意識的な磨り消しは加えられない。地文の撚糸は全てが L である。施文順位は <撚糸施文→沈線> であることか明瞭。	胎土の含有物の種類は当遺跡では一般的だが、砂粒は細かく、含まれる量も少ないようだ。色調は、81、83、84、87 が内外面共に明赤褐色で、82 が内面が明赤褐色で、外側が黒色、85、86 は内外面共に明褐灰色を呈する。 86 は輪積み部分での剥離資料。	4 C グリッド
88 ↓ 90	VII b	連弧文を有する深鉢で、地文が集合条線のものを一括。竈による 3 本沈線が施文の基本単位をなしている。沈線間は磨り消されない。90 は連弧文が棒状に閉じるように構成されている類で、接連部には逆「の」の字文が配されている。	胎土、焼成は同上。色調は、部分的に煤の付着で黒変したものもあるが、ほぼ明褐灰色を呈する。 90 は輪積み部分での剥離資料。	4 C グリッド
91 ↓ 93	VII c	地文に網文が施された連弧文土器である。91 は口唇下に沈線による横長の棒状文が配され、それと相連動するように 3 本の沈線による連弧文が同単位でめぐらされている。地文は 2 段の纏 R L で口唇下から即、縦位に回転施文されている。92、93 は胴部破片で地文はやはり R L である。	胎土、焼成は同上。色調は、91 が内面が明褐灰色で、外側が明赤褐色、92、93 は両面共に明褐灰色を呈する。	4 C グリッド
94	VIII	口頭部付近の破片であり、格子目（籠目）文のある資料である。半截竹管による斜行沈線文が集合化して施文された上に、それと交差するように細い粘土紐が貼り付けられている。従って、仕上がりは格子目（籠目）状を呈する。格子目文の下端には 1 本の粘土紐が被状に貼り付けられている。それ以下は、当破片の範囲内では無文。	胎土には白、灰、黒色等の小破片を多めに含有する。焼成は良好だが、やや脆弱。色調は内外面共に灰褐色を呈する。	4 C グリッド
95 ↓ 100	IX	上記までで分類不能な深鉢を一括した。95 は網文のみ、96 は沈線と網文、97、98 は沈線と刺突、99 は刻みを有した隆帯がめぐる。100 は凹線がめぐるといったように分類基準が統一しがたいで便宜上このように取りまとめた。なお、100 はより新しい段階の資料である。	胎土、焼成は当遺跡では一般的であり、特記する点はない。色調もほぼ一般的で、主に赤褐色を呈するものが主体を占める。100 は内外面共に黒褐色を示す。	4 C グリッド 100 は加古利 E III 式土器
101 ↓ 107	X a	網文のみが施文されている深鉢の胴部破片。全てが 2 段の纏 R L で縦回転を基本とする。101 は横回転による僅少例。	胎土、焼成は同上。色調は褐灰色～にぶい赤褐色の中にすべてがおさまる。	4 C グリッド
108 ↓	X b	撚糸のみが施文されている深鉢の胴部破片。	胎土、焼成は同上。色調は褐灰色	4 C グリッド



第16図 4Cグリッド出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
112		燃糸は109がrで、108、112がL、110、111がRである。	～にぶい赤褐色の範囲内におさまる。 108は輪積み部での剝離資料。	
113 116	X c	集合条線のみが施文されている深鉢の胴部破片。	胎土、焼成は同上。色調はほぼにぶい赤褐色を呈するが、113、115、116の外面は黒褐色を呈する。	4 C グリッド
117	XI a	浅鉢の破片であろう。9はこれを復原実測したもの。推定口径は26cmを測る。文様は、降帯の貼り付けによる棒内に沈線文様が配されているようであるが不詳。なお、胴下半には剥がれた痕跡が認められる。	胎土には、片岩、石英、長石、チャート、黒雲母その他の小砂粒が若干多く混入されているが、とりたてて特記される事項でもない。焼成も良好。色調は、内面が灰褐色で、外面がにぶい橙色を呈す。	4 C グリッド
118 121	XI b	浅鉢である。120は117と類似する器形となるのである。118は逆「く」の字を呈する口縁部からそのまま底部へと移行すると思われる。119、121は角張り、直立した口唇部から底部へと彎曲しながら移行する器形を呈すると思われる。	胎土、焼成は同上。色調は褐色～にぶい赤褐色の範囲におさまるが、118、120の内面は黒色を呈する。	4 C グリッド
122	XI c	器形は不明瞭であるが、あるいは有孔鉢付土器かも知れない。口縁は波状部を有し、有孔が1箇所と跨ぐにせり出す部分の基部が認められる。	胎土の含有物は同上であるが、砂粒は細かい。焼成は良好で堅緻。色調は内外面共に暗赤褐色～赤褐色を呈する。	4 C グリッド
7 8 123 124	XII a	深鉢の底部。いずれも2段の縄Rしが継ぎに回転施文されている。また、7、8には半截竹管による懸垂文と蛇行沈線の施文が見られる。124も半截竹管による平行沈線文がある。	胎土、焼成は同上。色調は、8が内外面共に黒褐色を呈し、7、123が内面が暗赤褐色で、外面がにぶい赤褐色、124が内外面共ににぶい赤褐色を呈する。 123、124は底部の円板との接合部分で剝離した資料。	4 C グリッド
125 126	XII b	深鉢の底部。どちらも地文に燃糸Lの縱走が見られる。	胎土、焼成は同上。色調は両者共に赤褐色を呈する。	4 C グリッド
127 130	XIII	浅鉢の底部。文様は全く認められない。	胎土、焼成は同上。色調はにぶい橙色～褐灰色だが、127、128、130の内面は黒色を呈する。	4 C グリッド
131	VII b	連弧文土器の胴部破片である。地文は集合条線。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共ににぶい橙色。	1 E グリッド
132	XIII	浅鉢の底部と思われるが断定できない。無文である。箇の整形痕が多く残されている。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に明赤褐色。	2 D グリッド



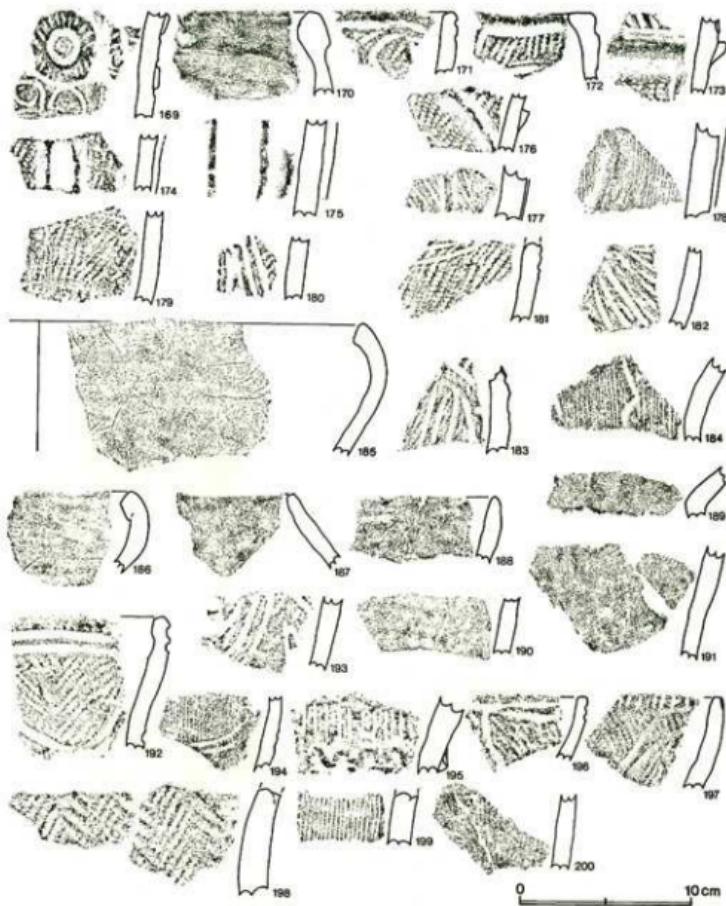
第17図 4Cグリッド出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎土・焼成・色調等	備 考
133	III e	矢羽根状沈線を地文とする深鉢の胴部破片であり、当資料は蛇行隆帯が剥落している。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に黄橙色。	2 E グリッド
134	III b	2段の繩 R Lの継回転を地文に、隆帯による懸垂文が貼り付けられている。隆帯断面はカマボコ状で、沈線は添えられていない。	胎土、焼成は同上。色調は、内面が褐灰色で、外面が暗赤褐色。	3 A グリッド
135	IV	矢羽根状沈線を地文とする深鉢の胴部破片で懸垂文も沈線による。	胎土、焼成は同上。色調は、内面が明赤褐色で、外面が黒褐色。	3 A グリッド
136	IV a	地文に2段の繩 R Lが継位に回転施文され、沈線による懸垂文が施されている。	胎土、焼成は同上。色調は、内面が褐灰色で、外面が明赤褐色を呈する。	3 A グリッド
137 139	IX	いずれも深鉢の破片。137は2段の繩 R Lが横に回転施文されている。139には刻みのせられた隆帯による渦状のモチーフが配されている。	胎土、焼成は同上で一般的。色調は、137が内外面共に黒色で、139が内外面共に明赤褐色を呈する。	3 C グリッド
138	VII c	地文繩文の連弧文土器。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共にぶい橙色。	3 C グリッド
140	II d	キャリバー状口縁を有する深鉢の口縁部破片であり、隆帯による棒状文内に継沈線が充填される。	胎土、焼成は同上。色調は橙色。	3 C グリッド
141	II d	同上。	胎土、焼成は同上。色調は、内外面共に明赤褐色。	3 D グリッド
142	X a	深鉢の胴部破片。地文の2段の繩 R Lが観察されるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は、内外面共にぶい橙色。	3 D グリッド
143	III d	地文には集合条線が施され、蛇行隆帯がその上に貼り付けられている。	胎土、焼成は同上。色調は、内外面共にぶい橙色。	3 D グリッド
144 145	IX	いずれも深鉢だが文様構成は不明瞭。144は沈線が添えられ、断面がカマボコ状を呈する隆帯が貼り付けられている。145は波状口縁の部分であり、地文の R L 繩文上に沈線が3本めぐらされている。	胎土、焼成は同上で一般的であろう。色調は、いずれも内外面がぶい橙色を呈する。	3 D グリッド
146 147	VII c	地文には2段の繩 R Lが継位に回転施文されており、その上には撚沈線による連弧文が施される。3本単位の沈線がモチーフを描いていくのが通例だが、147は口縁に1本の沈線がめぐらされているにすぎない。	胎土、焼成は同上だが、146は器面のザラつきが激しい。色調は146が内面が黒色で、外面がぶい橙色、147は内外面共に暗赤褐色を呈する。	3 D グリッド
148	VI	深鉢の無文部破片。	胎土、焼成は同上。色調は赤褐色。	3 D グリッド

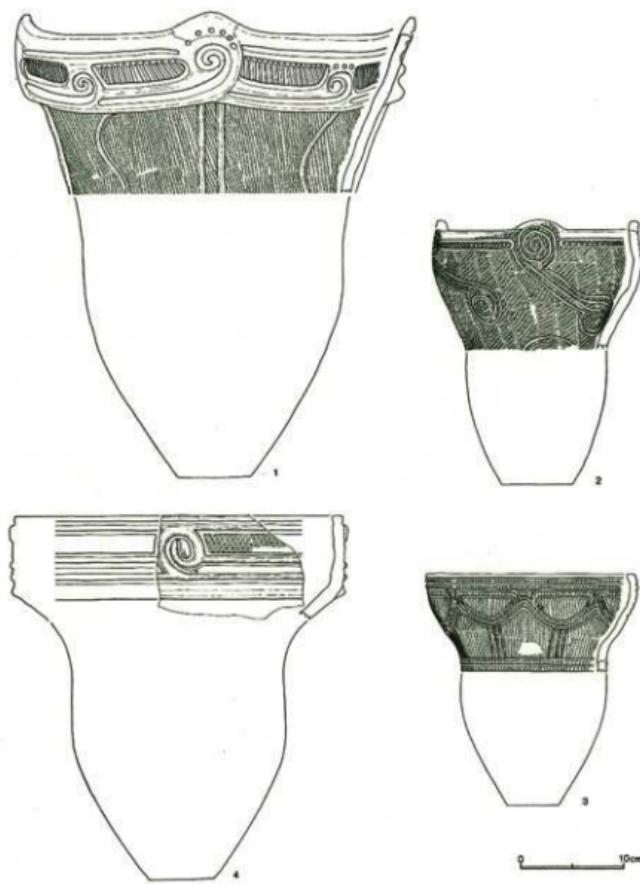


第18図 1 E グリッド(131)、2 D グリッド(132)、2 E グリッド(133)、2 A グリッド(134～136)、3 C グリッド(137～140)、3 D グリッド(141～148)、4 A グリッド(149～156)、4 B グリッド(157～166)、4 D グリッド(167～168) 出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
149	II a	地文に縄文が配される、キャリバー状口縁を有する深鉢。	胎土、焼成は同上。色調は、内面が黒褐色で、外面が明赤褐色。	4 A グリッド
154	II d	同じく、キャリバー状口縁を有する深鉢の口縁部破片。斜の沈線が配されている例。	胎土、焼成は同上。色調は、内外面共ににぶい橙色。	4 A グリッド
151	X a	胴部破片であるが口縁に近い部分に当たる。隆帯下には2段の縄R Lの縱方向への施文が認められるのみ。	胎土、焼成は同上。色調は、内面が赤褐色で、外面が黒褐色。	4 A グリッド
152	III b	深鉢の胴部破片。隆帯断面はカマボコ状で沈線は添えられていない。地文は2段の縄R L。	胎土、焼成は同上。色調は内面がにぶい赤褐色で、外面が灰褐色。	4 A グリッド
155	VII a	地文が撫糸Lの連弧文土器である。	胎土、焼成は同上。色調は、内面が暗赤褐色で、外面が黒褐色。	4 A グリッド
156	VII b	地文が集合条線の連弧文土器である。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に黒色で、外面には一部赤褐色の部分もある。	4 A グリッド
150 153	IX	150はさらに新しい段階の資料である。沈線下の縄文R Lは横回転による。153はモチフが全て半截竹管によっている。	胎土は普通より良好で、焼成も良い。色調は150が明赤褐色で、153が赤褐色を呈している。	4 A グリッド 150は加曾利E III式土器
157	II b	キャリバー状口縁を有する深鉢で、地文には撫糸R Lが施文されている。	胎土、焼成は一般的。色調は内外面共に明赤褐色。	4 B グリッド
158 160	II a	キャリバー状口縁を有する深鉢で、地文には2段の縄R Lしが、158では横位に、159では縦位に回転施文されている。隆帯自体はやや扁平化している。	胎土、焼成は同上。色調は、158は内面が明褐色で、外面が黒褐色、159、160は全体的に灰褐色を呈している。	4 B グリッド
161	II d	キャリバー状口縁を有する深鉢で、枠内には縦沈線が充填される。	胎土、焼成は同上。色調は内面が赤褐色で、外面がにぶい橙色。	4 B グリッド
162	IV a	地文に2段の縄R Lしが縦位に回転施文され、その上に竈による懸垂文等が配されている。	胎土、焼成は同上。色調は内外面共に灰褐色を呈する。	4 B グリッド
163 164	IV c	地文が集合条線の深鉢で、その上には竈沈線による文様が垂下される。	胎土、焼成は同上。色調は163が明赤褐色で、164がにぶい橙色を呈する。 164は輪積み部での剥離資料。	4 B グリッド
165 166	IX	いずれも深鉢。165には撫糸しが施文されている。166の沈線文様は半截竹管による。	胎土、焼成は同上だが、166は極めて堅緻。色調は165の内面が明赤褐色で、外面が黒色、166は内面が灰褐色で、外面が明赤褐色。	4 B グリッド



第19図 4C・3Dグリッド出土土器拓影図



第20図 第1号土壙(2～3)、第19号土壙(4)、4Cグリッド(1) 出土土器実測図